

---

# 政略結婚お断り！！

八郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

政略結婚お断り！！

### 【Nコード】

N7329B

### 【作者名】

八郎

### 【あらすじ】

西の武術大国『セントレア』王宮騎士団の一番隊長セツと団長のグレン。二人にはそれぞれある重大な秘密があるのだが・・・果たして最強コンビのこの二人に、王子の政略結婚をとめることができるのか？！王道恋愛ファンタジー！！

## 第一話

それは秘密だった。

秘密にしなければいけなかった。

他の誰にばれてもかまわない。

ただ……

あの人にはだけは秘密だった。

\*\*\*\*\*

海と山に囲まれた西の国『セントレア』

城下の港町には、たくさんの商船がやってくるがはっきり言って田舎。

いやいや、大自然に囲まれた平和な国。

今、この国ではある話題でもちきりである。

もちろんここセントレアの王宮内でもまたしかり。

「わたくしは東の姫君だと聞きましたけど」

「おれは宰相殿の娘だと聞いたぞ」

「酒屋のフィーリアが見初められたんじゃないのか」

「わたしは」

「おれは」

王宮内にある騎士団の鍛練場に行くまでの間、侍女や警備兵たちから聞こえたのはこんなか会話ばかり。

ときたま「セツ様はどう思われますか」と、急に話を振られるので困ってしまった。

こんな風に何度も呼び止められて、約束の時間にだいぶ遅れてしまった。

約束の相手、セントレアに話題を提供してくださってる当事者様が、怒ってないといいのだが……

「遅い……」

鍛練場の扉を開けると、そこには整った顔立ち、真っ黒な黒髪に、グレイの瞳の青年が仁王立ちをして、おれに睨みをきかせている。その一挙一動に、柱の影からこっそり鍛練場をのぞいていた女性たちから、黄色い歓声が漏れた。

「おまえの遅刻のせいで時間がない、早急に一勝負願おうか王宮騎士団一番隊隊長殿」

青年はムスツとしたまま剣を抜く。

「まつ待って下さい！！ もとはと言えば……そう！！ もとはと  
言えばグレン様のせいですよ。戴冠式を明後日に控えた次期国王で  
あるあなたがまだ結婚してないからっつ」

ガンツツ

その時、グレンはおれの頭を思いっきりぶん殴った。

「いきなり何するんですかっつ?!」

「敬語は禁止だといったはずだ。あと、お前が“グレンさま”なんて呼ぶな気色悪い」

「はいはい、グレン」

「よし。が、お前の遅刻とおれの結婚は関係ないだろうが!!」

お前だつてまだ独り身だし……」

最後の方は、声が小さくて聞こえない。

ちよつとは後ろめたさがあるのだろう。

「関係あるさ！！　ここ何日かずっと、おれはグレンの結婚相手についているんな人に尋ねられて足止めをくらわされたあげく、今朝は陛下に泣きつかれた」

「はあ?!」

「セントレアの次期新王陛下に妻も婚約者もないのは、彼に何か問題があるんじゃないか」と、グレンがことごとく見合いを断つた列国から陛下はさんざん嫌みを言われたらしい」

「……」

「で。悔しいから、陛下とおれで婚約者を選んでおいた」

「?!」

「東の大国の姫君だ、けつこつ頑張ったんだぞ。これでとりあえず列国から嫌みを言われることはないだろうけど……」

「どういうことだ？」

「あとは陛下に聞いてくれ、おれの勤務時間はとっくに過ぎてる」

「セツツ」

グレンが叫んでいるが、聞こえない振りをしてそれだけ言つと、おれは鍛練場を後にした。

これでいいんだ、と何度も自分に言い聞かせながら。

## 第二話

自分で言うのも何ですが。

この国でおれ『セツ・デ・クラリス』の名を知らない者はいない。

……たぶん。

各国から猛者があつまるアトラスの武術大会で準優勝。

賞金と、憧れの職業ナンバーワン・高収入・高待遇といわれる王宮騎士団への入団許可を得たのが16才の頃。

いずれも史上最年少。

で、現在18才。

これまた史上最年少で王宮騎士団の最強部隊・一番隊の隊長を務めている。

わあ、やっぱりおれってすご……いやいや、おれの話はいい。

今はグレン。

『グレン・テレシア・セントレア』

先程までおれと言いついて合っていたセントレアの王子、次期国王陛下の結婚問題だ。

前にも言ったように、今この国ではこの話題で持ちきりになっている。

現在20才。

もうとつくに結婚していてもおかしくないのに、婚約者すらいらないなんて王家では前代未聞。

幼馴染のおれでさえ、彼の浮いた話をひとつも聞いたことがない。陛下には『政略結婚なんぞしなくても、政治はできる』と言って、

かたくなに列国からの見合いを断り続けている。

まあ確かに、彼はまだ王位を得ていないにもかかわらず、大臣たち

に交じって政治をとり、国を良く治めていた。

しかも

し・か・も

彼は武術大会の優勝者。

王宮騎士団の元締め、王宮騎士団長も勤めている。

王子にもかわからず、だ。

つまり、おれはやつに……失礼。

グレン王子に負け、現在彼の部下、兼幼馴染。

友人としては、やはり彼の結婚問題については心配なわけで、今回ちょっとばかりおせっかいを焼いてみたのだが……

陛下はうまく話しをまとめてくれるだろうか。

実はもう、東の姫君はこの国に来ている。

実際会って話をしてみたら、聡明でやさしい姫君だった。

しかもかわいい!!

きっとお互い好感を持つだろう。

グレンはおれたちの自慢の王子だし、彼女もきっと大丈夫。

グレンには幸せになって欲しい。

おれにはできない。

部下としても、幼馴染としても。

あの秘密があるかぎり……

### 第三話

鍛錬場を後にして、おれは王宮の敷地内にある騎士団の寮ではなく、実家に帰ることにした。

明日は久々の休暇。

最近休みを返上して働いたり、剣術指導をしたりでろくに帰っていない。

王宮から馬をとばして1時間、町まで2時間と、だいぶ不便な山奥に我が家があるのも理由のひとつ。

まあ、孤児院を運営している我が家には、土地代も安いし広々してゐるし最適だ。

さて、早く家に帰ろう。

久々に子供たちにも会いたいし、母の手料理も食べたい。傾きかけた太陽を背に、馬に飛び乗り王宮を後にした。

途中無人の山小屋で騎士団の制服を着替えて、また馬をとばす。

院の子供たちや母にも、この仕事のことを言っただけではない。

ただ王宮で働いているとだけ話してある。制服のまま帰るわけにはいかなかった。

これにはある理由があるのだが、それはまた追々。

ただ、騎士団の制服を着てると、だれでも三割増しかっこよく見えるらしい……

それを子供たちに披露できないのが、残念で仕方ないんだけど。



「ただいま帰りました」

「……セーちゃん、おかえりっつー」

玄関のドアを開けると同時に、子供たちが飛び出してきて熱烈に出迎えてくれた。

正確にいうと、おもいつきりタツクルをかましてきた……

愛ゆえだと思うんだけど、通常業務を終え、1時間も休みなしで馬をとばしてきた今のおれにはちょっときつい。

「ほらほら、もう離れないとセーちゃんが苦しそうよ。それにもうお休みの時間でしょう」

小柄な金髪美女（美少女？）が、ゆっくりとおれから子供たちを離す。

「……はい、先生。おやすみなさいっつー」

子供たちはクモの子を散らすように、寝室に向かった。

彼らはこのかわいらしい金髪美女、もといこの孤児院の院長先生（つまり、以上に若いおれの母親なんだが……）を怒らせると地獄を見ることを良く知っているのだ。

「みんなあなたが帰って来たのがうれしいのね。さあ、疲れてるでしょう。ご飯食べる？」

「はい、いただきます」

久々の我が家はやっぱりいい。

母がいて、子供たちがいて、穏やかで暖かい。

でも、今日はいつもと少し違った。

目の前に、普段いるはずのない人がいるからだ。

「……父上?! 帰ってらしたんですか?」

そこには、仕事でめつたに家にいない海運商人の父がいた。

「おうセツ、久しいな。少し話がある……食べ終わったら一勝負

しようか」

「……はい」

なんとなく話の内容が分かってしまい、せつかくの母の料理がのどを通らない。

なんとか押し込んで、足早に父に続いて外に出た。

きつとおれの……例の話だ。

分かってるんだ。

あの秘密は

もう隠せないって……

## 第四話

静かな夜の闇に、剣がぶつかり合う音が心地よく響く。

「ちょっと会わない間に、また腕を上げたんじゃないか。セツ隊長」

「（思ってもないくせに）……早く本題に入ったらどうです？」

「まあ、そうせかすな。久々に会った我が子の成長ぶりに、喜びを噛み締めてるんじゃないか」

「父上がなかなか家に帰ってこないからでしょう」

剣を交えながら話すのは、けっこうきつい。

こっちはそろそろばててきたのに、剣の師でもある父はまだまだ余裕そうなのが悔しい。

かれこれ、この状況が1時間ほど続いているにもかかわらず、だ。

「あはは、それもそうだな。しかし、お前も王宮に入り浸りじゃないか」

父の声がワントーン下がり、そう言つとやっと剣を下ろした。

「そろそろ潮時なんじゃないか、セツ……セシリア」

「……分かってるよ」

それから、どちらともなく家に戻りベットに入った。  
が、なかなか寝付けない。

寝る前の適度な運動は、快眠につながるって言うけど今のはどうだ

った？

「潮時かあ」

思わず独り言ちて、ごろんと寝返りをうつった瞬間

ドン

という音と共に、ベットから落ちてしまった。

今日は厄日かもしれない。

グレンとの待ち合わせには遅刻するし、こちとら疲れてて早く寝たいのに、さっきの運動のせいで目がさえてしまうし。

さっきの父の言葉が頭から離れなくて、独り言ちてしまうし……おまけにベットから落ちるし。

セツ

本名『セシリア・デ・クラリス』 一生の不覚。

## 第五話

この国でおれ……いや、わたし『セシリア・デ・クラリス』の名を知る者は少ない。

一般市民なのだから当然と言えば当然なんだけど、わたしのそれは、一般市民のそれ以上。

なぜかって？

それはあの日。

わたしがまだ普通の女の子だった頃。

あの秘密ができた日にさかのぼる……

12年前のあの日。

わたしは、なぜか国王陛下と仲のよかった父に連れられて、生まれて初めて王宮という所にやってきていた。

「久しぶりだな、アル。変わりはないか？」

「はい、国王陛下もお元氣そうでなによりでございます」

「おいおい、よしてくれ。友人であるお前まで、そんな喋り方をするの？」

「ルカ……おれとお前はいつから友人になったんだ？」  
一瞬、それまでの和やかな応接室の空気が張り詰めた。  
控えていた騎士団は、父の無礼な態度にいつでも剣を抜く準備をし  
ているようだった。

「はははっつ」「」

が、当の二人は何がおかしいのか笑い転げている。

わたしには何がおかしいのか、さっぱり分からなかったが、どうやら二人はお互いを名前で呼び合うほどの仲らしい、ということも分かった。

それからしばらく二人で談笑していたが、陛下がふと、父の後ろでこそこそしていたわたしに声をかけてきた。

「ところで、そちらのおちびさんは？」

「ああ、おいでセツ。一応やつは国王陛下だからな、きちんと挨拶しとけ」

「おいおい……」

とても緊張していたわたしは『はじめまして……』と、父の後ろから少し顔を出してそれを言うのが精一杯。

「はじめまして、セツ。ねえどうだろう、うちの子の遊び相手になつてやってくれないかな。同年代の男の子がまわりにいなくてね……」

ふわりと穏やかに笑う陛下に、思わずコクコクとうなずいてしまった。

……ん?!

ちよつと待つて!! さつき陛下は『男の子』って言うてなかった?  
父や友人が『セシリア』は長くて面倒だからと『セツ』という男の  
子のような名前と呼ぶので、名前だけ聞いた人には、よく男の子と  
勘違いされていた。

髪も短いし、格好も男の子のようだけど(仕方なかったんだ。王宮  
に着ていくようなちゃんとした服が、男物しかなかったんだから)  
目の前にいるのに男の子に間違われるなんて……なんかショックだ。

「あの……」

「ありがとう、きつとあの子も喜ぶよ。じゃあそう言う事で。せつ  
かく来てもらったのに申し訳ないんだが、今から会議でね。アルも  
ゆっくりしていつてくれ」

『わたしはおとこのこじゃありません』

と言おうとしたのに、陛下はそれだけ言うつと足早に執務室から去っ  
てしまった。

呆然と立ちすくむ父と息子(いやいや娘だつて)

「まいったなあ」

父がぼそりと、こつつぶやくのも無理はない。

陛下の息子、この国の王子はただ一人。

王妃は王子を産んですぐ亡くなり、陛下が後妻をとることはなかつ  
た。

唯一の後継者であるグレン王子は、それ故によく命を狙われ、周囲  
はいつも護衛で固められているという。

それこそ周りは大人ばかりで、同年代の友人など皆無に等しい。

おまけに、列国や貴族の令嬢が王子に取り入るのを防ぐため、王子  
に女性が近づくことは禁止

という、暗黙の了解まであったのだ。

わたしが王子の友人になるのは、ちょっとまずいんじゃないだろうか……

と、今なら思えるのだが。

当時のわたしは、男の子に間違えられたものの友人が増えるのが嬉しくてしかたなかった。

しばらくすると、立ちすくむ親子のところを騎士団の隊士がやってきた。

「セツ殿、王子の所へご案内致します」

わたしはちらりと父のほうに目をやり、『いってもいい？』と目で訴えた。

「まあ、一日ぐらい大丈夫だろう……行っておいで」

「はい！！　いってまいります」

何が大丈夫なのかよくわからずに、わたしは笑顔で駆け出した。

これからどんな出逢いが待ち受けているかもわからずに……



## 第六話

『こちらでございます』と、連れてこられたのは王宮の奥にある中庭。

そこには、騎士団の制服を着た見慣れた人物がいた。

「……せんせい?!」

先生、こと当時の王宮騎士団団長『クロエ・バレンシア』は、驚いて目をパチパチさせているわたしにかまわず、いつもの穏やかな声で中庭へと招き入れた。

彼もまた父の友人の一人で、月に何度か孤児院を訪れて剣術指導をしてくれていた。

わたしも男の子たちに混じって指導を受けていたのでよく知っている。

普段は穏やかな人だけど、剣を持つと鬼の団長へと豹変するんだよね……

「わたしはグレン王子の剣術指導もしてるんですよ。ふふふ、常々セツさんと王子は良き友人、良きライバルになると思ってたんです!!」  
それで、ぜひ王子の剣術のお相手にと、陛下に頼んでこちらに連れて来てもらったんですよ」

先生はにこにこしながら、ゆっくりと前を歩く。

そうだったんだ。

先生は前から「筋がいい。ぜひセツさんにきちんと剣術を習わせてみてください」と両親に話してくれていた。

しかし、さすがの両親も娘を男ばかりの剣術指南場や騎士学校に入れるのはためらって『お願いします』とは言えなかつたらしい。

月に数回の剣術指導だけではちょっと物足りなさを感じていたけど、仕方ないかと諦めていた。

でも、王子さまの剣術の練習相手になるってことはつまり、先生からほとんどマンツーマン状態で剣術指導が受けられる！！こんな嬉しいことってない。

ん？！

ちよつと待つて！！ 前々から思つてたけど、先生もわたしのこと男の子だと思つてる？！  
じゃなきゃ1日だけとはいえ、わたしを王子の剣術の練習相手に指名したりしないよね？！

「はぁー」

何だか悲しくなつてきた。

「ん？？ どうかしましたか？」

「いえ、なんでもないです」

そういえば、当の王子様が見当たらない。

取り合えず気を取り直して、あたりを見渡していると、中庭にある百日紅の上から声がした。

「クロエ……そいつはだれだ？」

「ああー王子？！ またそんな所に登つて……早く降りてきて下さい。この子が以前お話ししていたセツさんですよ」

「ふうん……」

王子と呼ばれた少年は、さっと木から降りてわたしの目の前にやつてきた。

同じくらい背丈に黒髪グレイの瞳の少年は、わたしの周りのどの男の子とも違つて見えた。

妙に品格があつて、人を惹きつける力がある……だつてさつきから目がそらせない。

王族の人ってみんなそうなのかな？ さっき会った陛下にはそんなこと感じなかったけど……

「おい！！ 聞いているのか？」

「??？」

わたしは王子さまの前なのにぼーっとしていた。

「剣術は強いのかって聞いてるんだ」

「へ?! わっわかりません、ほかのひととあまりしたことないし

……」

「じゃあ勝負だ」

「しょーぶ?!」

「5本勝負だ、いくぞ!!」

王子は腰にさしていた2本の剣のうち、ひとつをわたしに放り投げた。

「ええ?!」

はっ早すぎない?!

もう少しお喋りしてからとか……せめて準備体操だけでもさせほしい。

ってというか何度も言うけど、わたし一応女の子だからっ!!

## 第七話

疲れた……

あれから小一時間。

剣を落としたら負けというルールで、わたしたちはずっと剣を交えていた。

結果は3対2でわたしの勝ち。

けどこの王子さま、すごく強くて苦戦を強いられた。

でも……こんなに充実した時間を過ごしたのは初めてだった

そのぶん疲れ方も半端なくて、最後の勝負が終わると二人で中庭に倒れ込んでしまった。

今までにここにこしながらわたしたちを見ていた先生は『お水を持てきますね』と、どこかに行ってしまった。

すると、隣で倒れ込んでいた王子はふとわたしの方に顔を向けた。

「お前……強いなだな」

わたしは何だか恥ずかしくて、体が熱くなって、吹き抜けの中庭から空を仰いだまま答えた。

「おーじさまも……つよかったです」

「グレンだ……」

「へ??？」

「クロエが言っていた。友人同士は名前で呼び合っただろう？ あと敬語も使っちゃダメだ」

「でも……」

「おれもお前をセツって呼ぶ」

名前を呼ばれてまた体が熱くなり、“友人同士”と言う言葉に自然と笑顔がこぼれた。

何だか無性に嬉しい。

「え〜っと、じゃあグレンさま？」

「“さま”もつけちゃダメだ」

「グ……レン？」

「よし！！」

王子さま……じゃなくて、“グレン”は耳まで真っ赤になっている人のことは言えないけれど……

「じゃあクロエが戻ってくる前に行くぞ」

「どこに？！」

「まず、厨房で食料を調達するだろ？ それから王宮の裏の森に行くぞ？ あそこへは秘密の抜け道があるんだ！！あとは……」

「そんなことしていいの？！」

次から次に出てくる無謀な計画に、思わず口をはさんでしまった。

「いつか友人ができたら一緒にやりたいと思ってたんだ。行くぞ！！」

疲れてくたくたのはずなのに、グレンは勢い良く立ち上がり、わたしも口では躊躇いながらも足は自然とグレンの後を追う。

内心とてもわくわくしていた。

王宮の中を探検できることも嬉しかったけど、グレンとまだ一緒にいられる。

まだ出会って数時間しか経っていない人のはずなのに、それが何より嬉しかった。

## 第八話

「セツさんまで巻き込むなんて……グレンさまは王族としての自覚が無さ過ぎます！いいですか」

クロエ先生は怒っていた。

というか、あきれていた。

怒られている当の本人が、全く悪びれた様子がないのも原因の一つだろう。

その後、王宮の厨房に入ってすぐに先生がやって来て、中庭に逆戻りさせられた。

料理長や厨房の人たちは温かく迎えてくれたけど、やはり仕事の邪魔になってしまうし、幼い王子が供もつれずに歩き回るのは、例え城の中でも良しとされていない。

と言うことで、只今お叱りを受けている最中だ。

「まあ、お気持ちは分かりますが……これからは気をつけて下さいね」

「はい」

答えはしたものの、グレンに反省の色はない。思わずくすりと笑ってしまったら、

「セツさんも、今度は止めて下さいね」と笑顔でいわれてしまった。

笑顔で怒る先生ほど怖いものはない。

「あっ、そうでした。陛下がグレンさまをお呼びでしたから、すぐ行ってください」

「……行きたくない」

「じゃ、ありません」

「はあ、分かったよ……なあセツ」

いきなり名前を呼ばれて、心臓が大きく跳ねた。

これって驚いたから？

「すぐ戻ってくるから、まだいろよ？」

「うん」

笑顔で答えたのは言うまでもない。

先生もグレンについて行ってしまったため、中庭には私だけ。

王宮という所はもつと慌ただしくて、賑やかなものかと思っていたけど、ここはやけに静かで寂しさを覚えた。

ふとグレンを思う。

彼も一人、いつもこんな寂しい思いをしていたんだろうか。

グレンともつと遊びたい。

話がしたい。

笑顔がみたい。

友人に対するそれとは、また別の感情が芽生えるのに、それ程時間はかからなかった。

## 第九話

グレンが戻って来るよりも、父がわたしを迎えに来る方が早かった。

「セツ、そろそろ帰るぞ」

「えー、もうかえるの？」

グレンが戻ってくるのに……

「そろそろ帰らないと、日が落ちたら家に帰れないだろう？」

「だめだよ。まだここにいる、ってやくそくしたんだー！」

わたしは珍しく地団駄を踏んで、その場に座り込んだ。

「手紙を書いておけば分かってくたさるよ？」

「でも……じゃあまた、おーきゅーにつれてきてくれる？」

その言葉に、父の顔が少し陰る。

「……あのなセツ、女の子は王子と友人になったり剣術の練習相手になったりしてはいけないんだよ」

「“おとこのこ”だったらいいの？」

「うーん」

「じゃあわたし……おれ、きょーからおとこのこになるよ。それならいいでしょ？！」

『そう言う問題じゃないんだけどな』と、父は苦笑しながら私の手を引いて、帰路につこうとした。

が

「セツっつっ！……！」

名前を呼ばれて立ち止まる。

「グレン?!」

走ってきたのか頬は赤く色づき、息を切らしていた。

「もっ……帰るのか？」



グレンはわたしを見てから、ちらっと父の方を見やる。

「うん……」

まだ遊びたい、また会いにきたいけど、父の様子を見ると王宮に来れるのは今日が最初で最後のようだ。

けれど、さよならを言うのが嫌だった。

会えなくなるのが嫌だった。

「また来い……絶対来いよ!!」

そう言ってくれるグレンに、首を縦に振ることができず父を見上げる。

すると、ずっと困った顔をしていた父が、グレンを見てからニヤリと笑った。

「グレン王子。（面白そうだから）セツをまたどうぞよろしくお願い致します」

この時のわたしは、父親らしからぬ彼の考えを知る由もなく、嬉しくなつてグレンにおもいつきり手を振った。

「またね、グレン!! またくるから!!」

「おっ」

その日からわたしは……

おれは

殆ど毎日王宮に通った。

父との約束でこのことは誰にも秘密。

家では女の子。

途中の山小屋で男装して、王宮では男の子という二重生活を送ることになったけど、苦ではなかった。

今まで以上に剣術に励み、一人で王宮に行けるように乗馬も頑張った。

剣術の練習相手だけではなく、ぜひ御学友にもと推され、勉強もたくさんした。

剣術では負けたり勝ったり。

悪戯をして一緒にクロエ先生に怒られもした。喧嘩もした。

だけど

グレンといるのはいつも楽しかった。

おれたちは

幼なじみで、親友になった。

出会った時から感じている。

熱く、淡い思いは見ないふりをして。

男

セツ・デ・クラリスとして。

## 第十話

出会ってから12年たった今。

グレンの友人はもうわたしだけではない。

元来人好きのする性格で、彼のまわりにはいつも沢山の人が集まるようになっていた。

男女問わず……

そう、『王子に女性が近づいてはならない』という暗黙の了解は、彼が社交界に出るようになってからは意味のないものとなっていた。

顔良し

頭良し

性格良し

三拍子揃って、尚且つ西の大国（田舎だけど）の王子ときたら、列国の姫君や貴族のご令嬢に、近づくなどと言う方が無理な話。

一方わたしはというと、相変わらず毎日王宮に通っていた。

何かあったかと言えば、2年前。

件の武術大会に出たことくらい。

2年前

このころからグレンは、大臣たちにまじって会議に参加したり、列国を訪問したりと忙しくなっていた。

なかなか以前のようには会えない。  
それでもわたしはある目的のために、毎日王宮に通い、クロエ先生に稽古をつけてもらっていた。

「今日はここまでにしましょうか」

先生がゆっくりと剣を下ろす。

「はい」

ハードな稽古に息が上がる。

先生は今、軍事のトップ『クロエ元帥』になっていた。

「この調子だと大丈夫そうですね」

「だといいんですが……今日はありがとうございました」

「お疲れさまです。あっそうそう、今日か明日にはグレンさまが隣国の視察からお戻りになるそうですね」

どくと心臓が大きく跳ねた、ほろびそうになった顔を急いで元に戻す。

「グレン……さまは、最近忙しそうですね」

「ええ、でもセツさんという時はとても楽しそうですね。帰って来られたらお相手お願いしますね」

またもや顔が緩んだけど、今のは親友として喜んでいいよね？

と言うことで

「はい」

と笑顔で答えた。

稽古が終わると、足は自然と昔よくグレンと剣術の練習をしていた中庭へと向かう。

何だか懐かしいな……

感慨に耽っていると、遠くから声がした。

「セツ!!」

数日ぶりのあの人がわたしを……おれを呼ぶ声に胸が熱くなった。

「グレン、もう帰ってたのか？ おかえり」

いつかのように走ってきたのか、頬が色づき、息をきらしているのを見て、自然と笑顔がこぼれる。

「ああ、ついさっきな。って、それよりどういうことだ?!」

今まで笑顔だったはずのグレンの顔に、急に影がはしり眉間にしわが寄る。

わたし何かしっちゃった?!

「えっと、何が?」

「何って……お前が武術大会に出るって聞いたんだが?」

ギクリつて言う擬音は、こんな時に使うんだろう。

「……誰に聞いた?」

「クロエに吐かせた」

はぁ

小さくため息をつく。

こっそり出場して、驚かせようと思ってたのに……

国内外の強者が集まるセントレアの武術大会は、3ブロックに分かれたトーナメント式。

上位に入ると王宮騎士団の入団試験を受けることができる。

実質王宮騎士団への入団試験のようなものだった。

が、大会の賞金目当てのころつきも多く出場するので、なんでもあ

りの非常に危険な大会とも言えた。

「何か問題でもあるのか？」

「あるさー！！ お前まだ十六になったばかりじゃないか？！」

確かに、大会出場者の平均年齢は二十代後半から三十代。でも、大会規則に年齢制限があるわけではない。

ちなみに出場者男子のみと言う記述もない。

「そうだけど……別にかまわないだろ？ クロエ先生だって二十歳で出場してるし」

そう言うと、グレンはますます眉間にしわを寄せて俯いた。

わたしだってまだ早過ぎる気はする。

でももう時間がない。

いつまでもこのままではいられない。

次第に、努力では補えない男女の体力の差が出てきた。

男とも女ともつかない中途半端な今の自分は、グレンの親友に相応しくない。

それでもまだもう少し。

せめてグレンが王位に付き、后を迎えるまで側にいたくて、武術大会に申し込み、クロエ先生の地獄の特訓に耐えてきた。

それもこれも、上位に入って騎士団に入団し、王宮の敷地内にある騎士団の寮に入るため。

少しでも

グレンの側にいるために……



## 第十一話

それからみなさんご存知の通りで、今に至る。

わたしは無事その大会で準優勝し、王宮にある騎士団の寮で暮らせるようになった。

これで以前より、少しはグレンに会えるようになったはず!!  
と思ったのに……

何故かその大会にグレンも出場して、優勝までしてしまった。

グレンは『王子と王宮騎士団団長』という二足のわらじで、ますます忙しくなり、わたしも騎士団の仕事に追われる日々で、何だか以前よりもますます会えなくなった気がする。

昨日は久々に会えるはずだったのに、陛下やみんなの足止めのせいで大遅刻。

おまけに、とうとう例の婚約話をグレンにしてしまった。

勝手に婚約者を決めたりして、きつと怒ってるだろうな……

前にも言ったように、グレンはなかなか后を娶ろうとしない。

城下町に好きな人がいるんじゃないかという噂も流れたが、親友であるわたしにさえ何も話してはくれなかった。

次第に列国からの風当たりも強くなってきたので、陛下と内密に、とりあえずの婚約者を決めたのがまずかった。

婚約者のお姫様……来ちゃったんだよね。

聡明でやさしく、愛らしい。

東の大国の姫君を追い返すわけにもいかない。

でもこのままでは、とりあえずの婚約者の名は近日中に列国に広まり、『とりあえず』なんかではなくなるだろう。

「はあ」

わたしは今日で何度目かのため息をつく。

幼馴染として、親友として、彼の結婚問題を心配していないわけではない。

心のどこかで何かどろどろしたものが見え隠れしているけど、やっぱり彼にはきちんとした姫君を後に迎えて、幸せになってほしい。その点では件の姫君は完璧だった。

12年間秘めてきたこの思いを断ち切る為にも、この縁談がまとまってくれるのを祈るばかり。なんだけど……

「はあ」

いつもはかつらの中に隠している肩ほどまである金髪をなびかせ、

またもや盛大な溜め息をつきながら街を歩く。

昨日あれからなかなか寝付けず寝不足気味。

今日は久々の休暇だが、わたしの休暇の殆どは、孤児院の食料・日用品の買い出しで終わってしまう。

なんてったって、街まで馬を飛ばして2時間。

少数で経営している孤児院では、買出しに行く暇はない。母は『せっかくの休みなんだから、ゆっくりしなさい』と言ってくるんだけど、

お給料の殆どを家に入れてるとはいえ、非常に個人的な理由で院の手伝いをせず、王宮で働いてる身としては何だか心苦しい。

さて

わたしは大量に書かれた買い物リストを握りしめながら店に入った。店内はいつにも増して賑やかだ。

「いらっしやーい。あら？ セシリアじゃない?! 最近全然顔見せないんだもの、ちゃんと生きてるのか心配してたのよお」

店のカウンターから出てきた金髪美人に、握り締めていた買い物リストを渡した。

「もうすぐ戴冠式だから忙しいんだ、これに書いてあるやつよろしく」

「了解、そこに座って待ってて勤劳少女」

彼女はこの何でも手に入ると評判の酒屋（って言っているのかな）の看板娘『フィーリア』

わたしの数少ない女友達の一人で、美人を鼻にかけない気さくな性格は、騎士団員の中でも街でも評判が高い。

が、もちろん彼女にも城で働いている、とだけ言っており、騎士団で隊長やってますとはさすがに言えないでいた。

でも嘘はついてないぞ、嘘は。

「あつ、そうそう」

フィーリアは、手際よく入り用の品を袋に詰めてくれながら話し始めた。

「さつきそこで騎士団長さまを見たって子がいたのよ」

「えつつ?!」

グレンが街に? ありえない!!

普通団長の業務は、王宮内で行われる。

王子としての仕事もあるグレンが、街まで出て来るなんて、何かよつぽどのがない限りありえないはずだ。

何かあったのかと、急に不安になってきた。

戴冠式前で、列国から王侯貴族や沢山の商人、それを狙う人々もちろん沢山セントレアに集まって来ており、国内の情勢は非常に不安定だ。

こんな時に休みをとるんじゃないやなかった……

しかし、わたしの杞憂は杞憂に終わった。

「誰か人を探してるらしいわよ」

「え?」

## 第十二話

「人って…?!」

指名手配犯か何かを追ってるんだろうか。

「さあ？つて、そこは問題じゃないでしょう?!あのグレンさまが来てるのよ。セシリアもそんな服着てないで、もっと色っぽいの着なさいよ。何かあるかもしれないじゃない」

もちろんわたしは第一報を聞いてすぐ着替えたわよ

つと言つて、フィーリアはくると回つて笑つて見せた。

女のわたしでもどきりとするのだから、男の人は腰砕け確實。

「何かなんてあるわけないよ。グレン…さまの婚約者も決まっただしね」

セントレアは自由結婚主義、身分に関係なく誰とでも結婚できる。

王族もまたしかりでグレンの母・亡き女王陛下も元一般庶民。

お忍びで街に来ていた陛下に見初められたらしい。

だから、この国ではシンデレラストーリーが無きにしも非ずなんだけど…

残念ながら、今回はそういうことはないだろう。

「なーんだ。もう婚約者決まっちゃったのかあ」

「残念だったね」

「じゃあわたしはセツさまにしようっ」と

えっっ?!

と心の中で叫んでも、鍛えたポーカークーフェイスは崩さない。

「あの人は…あまりお勧めできないよ」

「それはセシリアが王宮でいい男に囲まれて仕事してるからよ。羨

ましといったらないわ」

そう言うと、店にいた男性客たちから

「「フィーリアちゃんおれたちの立場は?!」「」  
と野次がとぶ。

が、彼女の笑顔で一掃された。

「騎士団の方々は別格よ。グレンさまは残念だったけど、セツさまとかクロエさまとか：独身のいい男はまだ沢山残ってるわ。荷物は預かってるから、行ってらっしゃい」  
と、いきなり笑顔で店を追い出されてしまった。

グレンの護衛プラス戴冠式前の見回り強化で、街にはいつも以上に騎士団の隊士が来ているらしい。

フィーリアには『騎士団の方々と出会えるチャンスよ。わたしもお休みだったらなあ』と言われたが、わたしにとっては秘密がばれる可能性大の危険な日でもあった。

## 第十三話

店を出て辺りを見回すと、戴冠式前ということもあってか異国の商人や見知らぬ顔が多い。

フィーリアの言う通り、制服を着た騎士団の姿も目につく。

今までは女装…ではないんだけど、『セシリア』として騎士団の間と街ですれ違っても、『セツ隊長』と同一人物だと気付かれることはなかった。

しかし、こんなに多いと誰かにバレてしまっんじゃないだろうか…

そんな一抹の不安がよぎる中、後ろから誰かに呼び止められた。

「よお、嬢ちゃん」

ああ嫌な予感

この声は…

「街で会っても声をかけないでくれ、って話したと思うんだけど？」

「つれないねえ」

赤髪の青年はそう言いながら、隣に並んだ。

彼は王宮騎士団二番隊隊長『ヴァン』

元流れの傭兵で、二年前の武術大会でわたしとグレンとは別のブロックで優勝し、今はこの地に根を下ろしている。

その強さと頭の回転の速さは認めるけど…

同い年のせいかが気が合つらしく、最近グレンと仲が良い…

男にやきもちなんて、と笑ってくれてかまわない！！

必死になって守ってきた親友の座さえ最近危ういのだ。

しかも、ヴァンには女だとバレてしまっている。休暇中偶然街で会った時『よお隊長。いつもは女だなんて思えんが、そんな格好してるとやっぱ普通の嬢ちゃんだな。』と声をかけられてしまった。

しらを切り通せる相手でもなかったたので、本当の気持ちは隠して

『友人として、側にいるために男装している』

と言ってしまったんだけど…

秘密にするって約束守ってるでしょうね?!

こっちは、口止め料にたっかい酒を奢ったんだぞ、

と何だかいるんなことが思い起こされて、眉間にしわが寄る。

「グレンが来てるんだって?」

若干睨みつけながら話を続けた。

横並びになっていつもより賑やかな街を歩くと、2人とも背が高いので雑踏から頭一つ分飛び出してしまう。2人ともってというのがちよつと悲しいけど

「聞いてないのか? まあ、街に行くたびに嬢ちゃん…セツ隊長にお伺いはたてねえか」

え?

「どづいつこと?!」

一瞬足を止めて立ち止まる。

「どづいつ…」

「街に行くたび」って、グレンは良く街まで来てるのか?!」

口調は荒くなり、つい早口になってしまった。ヴァンはきょとんとした顔でこちらを見ている。

「来てるだろう? 知らなかったのか?」



知らなかった。

昔は何でも話してくれたのに…

王宮に来た商人に国宝を売って怒られたとか  
おやつに食べた焼き菓子美味しかったとか  
中庭の百日紅の花が咲いたとか

どんな些細なこともすべて

わたしはそんな時間が大好きだった。

それが今では、街に来ていたことも知らなかったなんて…

『セツ』  
は彼の護衛としても、役に立たなくなってしまったのだろうか。

「おい、大丈夫か？」

ポーカーフェイスは崩していない。

それでも、僅かな変化を読み取り気遣ってくれるヴァンは、悔しい  
けどいいやつだ。

「大丈夫…ありがとう」

動こうとしない足を無理やり上げて、また歩き出す。

彼ならきつとずっと、あの人の良き友人になってくれる。

『セツ』が『セシリア』に戻って、

あの人のもとを去った後も…



## 第十四話

いつの間にか街の雑踏を過ぎ、街外れまで来ていた。

この辺りは落ち着いた喫茶店が一件あるのみで、街の賑やかさが嘘のようだ。

「そついえば嬢ちゃん、この後予定は？」

「特にないけど？」

さっきのわたしの様子を心配して、ヴァンが買ってくれた水飴をくわえながら答える姿は、小さな子供のようであつと情けない。

「よし。じゃあちよつと手伝ってくれよ」

いきなり手を引つ張られて、そのたつた一件の店に足を踏み入れた瞬間。

すべてが止まつた気がした。

店の一番奥の席に、黒髪の青年が座っている。

思いつめたような顔をしてお茶を飲む姿は、それでもどこか優雅で店内にいる数名の女性客は、その青年に声をかけたそつにちらちらと奥の席に目をやっていた。

わたしは店の奥に入つて行くこととするヴァンを急いで止め、その青年に気づかれないように一生懸命声を抑えてヴァンに掴みかかる。

「なんでグレンがここにいるの?!」

そつ、いつもの王族の服でもなく騎士団の制服でもないけれど、そこにいたのは『グレン・テレシア・セントレア』その人だった。

「さつき街に来てる、つて話しただらう？」

「そつという問題じゃない！なんでわたしをここに連れてきたんだつつ?!」

ヴァンはまたきよとんとした顔をしている。間をおいて、あぁっと口を開いた。

「大丈夫。ばれない、ばれない」  
いや、ばれる。

いくらなんでもばれるだろう!!

パニック状態のわたしを尻目に、ヴァンはどんどん店の奥に行ってしまう、とうとうあの人に声をかけてしまった。

「よおグレン、待たせたな」

青年：グレンはゆっくりとカップを置き、顔を上げた。

「遅かったなヴァン、どこまで行ってたんだ？」

「助っ人を連れて来るって言っただろう？」

そう言っつてヴァンはわたしの方に目をやった。グレンもその視線の先を追う。

「それにしては随分おそかつ……」

遅かったな、つと言いたかったのだろう。

目が合った瞬間動きが止まり、わたしは持っていた水飴を手から滑り落とした。

でもそれはほんの一瞬で、すかさずヴァンが間に入る。

「ああ、こいつが助っ人に来てもらった“セシリア”だ。女がいた方がいいだろう？セシリア、知ってるかもしれんが“グレン王子”だ」

呆然としているわたしとグレンとは対照的に、ヴァンは悪戯をしかけて面白がっている子供のように満足げな笑みを浮かべていた。

おまけに“グレン王子”という言葉が出て、店内の女性客たちはざわめき立ち、悔しいことに顔のいいヴァンの相乗効果で閑静なはずの喫茶店には黄色い歓声が響き混乱状態。

わたしたちは店主の好意で、奥の部屋へと通された。

茶色とベージュで統一されたその個室は、お洒落で落ち着いた空間だったんだけど、わたしは気が気でない。出来ればあの女性客たちに紛れたかった…

ふわふわのソファに腰を下ろすと、グレンがやっとな口を開く、  
「先程は申し訳なかった。あなたがセツ…友人に似ていて驚いたもので…」

え〜と、これは…

ばれてないんだろうか？ほっとしたけど、何だか喜べない…でも本人です、とも言えなかった。今まで築いてきた『セツ』としての信頼を失いそうで怖い。

目を合わすことができず、俯いたまま答える。

「いえ…わたしもまさかグレンさまがいらっしやるとは思っておりませんでしたので驚いてしまって、失礼し…」

「ちよつと待った」

言い終える前にグレンに遮られた。

「敬語じゃなくてもかまわない、おれのことでもグレンと呼んでくれ。街中で“グレンさま”なんて目立つだろう？」

ああ、どっかで聞いたなこのセリフ。

「はい、分かりました…じゃなくて…分かった」

「その調子で頼むよ」

顔を上げて目が合うと、グレンがはにかむように笑うので、わたしもつられて笑ってしまった。

## 第十五話

徐々にこの違和感といか、緊張感というか…そういったものが解けてきた。

運ばれてきたアールグレイの紅茶を啜りながら、先程から気になっていたことを聞いてみる。

「あの…ところで“助っ人”ってというのは？」

すると、途端にグレンはまた思いつめたような険しい表情で俯き、それを見たヴァンが代わりに答えた。

「人を探してんだよ」

「人を？」

「やっぱり指名手配犯？」

そういえばグレンは私服だけど、ヴァンは騎士団の制服を着ている。そんなことに気を取られていたわたしの質問に答えたのは、険しい表情のまま顔を上げたグレンだった。

「ある女性を探してるんだ」

いつも冷静沈着で、実年齢より老けて…落ち着いて見えるグレンが、年相応の青年の如く顔を高潮させていく。

ふと、昔一緒に悪戯をした、まだ無邪気だった頃を思い出した。

が、グレンはそのまま黙ってしまい、こちらは全く話が掴めない。痺れを切らしたのはヴァンだった。

「グレンじゃ埒が明かねえからおれが話すぞ。まあその…我らがグレン王子は昨日めでたく婚約者が決まったんだが、その日の夜には婚約破棄だ」

えっっ？！

心の中でおもいきり叫んだ。わたしがどんな思いで婚約を取り決めたと…

ふとグレンの方を見ると、ばつの悪そうな顔をしながら紅茶を飲み始めた。そんなグレンに構わず、ヴァンは昨晚のことを話し出す。

「では、この婚約はなかったことにしてよろしいですね？」

王宮の一室

グレンは客間：東国の姫君『リンファ・アカツキ』が滞在中の部屋から出ようと、椅子からゆっくりと立ち上がった。

「構いませんわ。国交と対等な貿易条約が結べればそれで十分ですもの」

華のように笑う可愛いらしい顔とは裏腹に、姫君は頭の切れるさっぱりとした性格のお嬢さん…というのが、グレンの付き人として一緒に部屋に来ていたヴァンの、姫君に対する印象だった。

「ところで、やはりあの噂は本当なんでしょうか？」

グレンが一礼をして、ドアノブに手をかけようとした瞬間、姫君はふと思い出したようにつぶやいた。

「噂…ですか？」

「ええ、グレンさまは男色の気があるって…」

「「はあっつ?!」「」

一同驚愕。

一番驚いたのはヴァンで、瞬時にグレンとの距離をとった。

「おいヴァン、逃げるな。姫君、それは全くの流説です」

リンファは頬に手を当て首を傾げる。

「あら？ではどうして婚約も結婚もなさらないの？誰か思ってたっしやる女性がいるなら、とっくに婚約なさってるはずでしょう？セントレアは王族も自由結婚主義が通ると聞きましたわ」

「それは…そのような女性がいるにはいるのですが…何分わたしの片恋で…」

動揺して青ざめていくグレンとは対象的に、姫君は嬉々としてとんでもない提案を持ち出した。

「では、この機会にその女性に思いを告げてみてはいかがですか？そうだね。戴冠式までにその女性に思いを告げて、わたくしにも会わせて下さいな。それを婚約破棄の条件として提示します」

「そりゃあ妙案ですね、姫君」

代わりに返事をしたのはヴァンだったが、面白がっているのが見て取れた。

「ふふ、楽しみにしてますわ」

「で、現在に至るといふ訳だ」

話を聞き終わったわたしは、昨晚のグレンより動揺していると思う。紅茶を持つ手がかすかに震えている。

本当にわたしは何も知らなかったんだ。

『それは…そのような女性がいるにはいるのですが…何分わたしの



片恋で…』

ねえ、グレン

その人はいったい…誰？

## 第十六話

震える手を必死に抑えて、落ち着こうと紅茶に口をつける。

「それでわたしに手伝って欲しい事と言うのは？」

ヴァンは紅茶を一気に飲み干して、突然立ち上がった。黒を基調に金の刺繍をあしらった騎士団の征服が翻る。

「その女をグレンと一緒に探して欲しいんだよ。金髪碧眼だつてこ  
としか分かってないんだ」

「どういうこと？」

「つまり、奥手で真面目な我等がグレン王子は、想い人のお嬢さん  
に声をかけたこともないってこと。名前も住んでる場所も知らない  
らしい」

動揺はすっかり消えて、あっけにとられていた。

グレンは小さい頃から軍神だ、次期賢王だと騒がれていたけれど  
女性関係の流説を聞いたことがなかったのは、かなりの奥手だった  
から？

「ちょっと待った。わたしも含めて金髪碧眼の女性なんてこの国に  
は山ほどいるのに、どうやって探せって？」

「ここは人海戦術だろ」

「たった3人で?!」

「いや、正確には2人だ」

答えたのはグレンだった。その答えに目を見張る。

「2人？」

「こいつは見ての通り勤務中だ。いらんといったのについて来たと思  
ったら、急にいなくなつてあなたを連れてきた」

そう言つてグレンは視線をわたしへと向ける。見つめられると息が  
詰まりそう。

つていうか、わたしが来なかったら1人でその女性を探そうとして  
たのか？

「ありえない…」

「？」

首を傾げるグレンに、わたしは心を決めた。

親友として少しでも役に立ちたいと思って政略結婚の話を持ってきたけれど、好きな人がいるのなら話は別。

「分かった。手伝おう」

ヴァンに続いて立ち上がる。

「頼りにしてるぜ、嬢ちゃん。結果を楽しみにしてるよ」

先に店を出て仕事に戻ったヴァンは、最後にグレンに耳打ちをしてケタケタ笑いながら行ってしまった。

「わたしたちも行きましょうか」

「ああ…」

ヴァンの分の会計も済ませて、裏口から店を後にした。もうすぐ春だというのに、風は以前として冷たい。

さあ、やるか

気合いを入れて歩き出したのに、横を見るとグレンがいない。

振り返ると裏口の前で立ち止まったままだ。

「すまない」

「？」

「いや…今日は休暇か何かだったのだろうか？せっかくの休みにこんな事になってしまっ…」

わたしは勢い良く首を横に振る。

「我らがグレン王子の一大事ですから。何かお手伝いさせて下さいよ」

今できる最高の笑顔でグレンに向ける。

悲しんではいられない、誰か好きな人がいてもかまわない。  
わたしはあなたの親友だから  
そう、心から思う。  
力になりたいと…

グレンは苦笑すると、やっと隣に並んだ。

「敬語に戻ってるぞ」

「あっ…」

「それから…“セシリア”と名前で呼んでもかまわないか？」  
顔が真っ赤になったのは、きっと寒さのせい。

本当の名前を呼ばれて照れたからでは決していない

「どうぞ…ご自由に」  
はず。

「では、セシリア。よろしく頼む」

すっと手を差し出され、握り返そうと右手を差し出しかけて  
途中で勢い良く引つ込めた。

同年代の女性より剣だこやら豆やらで傷だらけの手は、差し出すの  
に一瞬戸惑ってしまふ。

引つ込めた手を見て怪訝な顔をしたグレンに、勇気を振り絞って同  
じく傷だらけの手を握り返す。

「よろしく、グレン」

## 第十七話

「あのグレン、見つからないんだけど？」  
「うーん」

喫茶店のあった山のふもとから街の中心部まで、どれほど女性に声をかけたことか。

端から見れば、新手のキャッチセールス。

わたしたちは視界に入った全ての女性に、とにかく声をかけまくり

『金髪碧眼の女性』のことを聞いてまわった。

しかし返ってくる答えはいつも

『そんな子山ほどいるわよ』

と

『そんなことよりお兄さんたち、ちょっと時間ある？』だ。

どうも引つかかるのは

『お兄さんたち』

と複数形になっていること。

短髪の鬘をかぶっていないにもかかわらず、わたしってお兄さんに

…男に間違われてる？そりゃあ今日の服も、いつものごとく男物。

もうちょっとお洒落で女の子らしい服を着てくるんだったかな。

尋ね人がなかなか見つからないこととは別に、そのことでも少々落ち込んでいた。

とぼとぼとグレンの後ろをついて歩いているそんなわたしとは対照的に、彼は至って元気……

いや、むしろ喫茶店で会った時より生き生きしている。

最近増えてきた社交辞令の笑顔ではない。

まだ見ぬ思い人に心弾ませているのか、子供の頃見た自然な笑顔は重苦しい気持ちを幾分軽くしてくれる。

そんなこととは露知らず、意気揚々と前を歩いていたグレンは突然立ち止まりわたしを呼び止めた。

「セシリア、あの店にも行ってみよう」

指差したのは、白壁の被服店。小さな窓からは、可愛い服や小物が数点見える。

入ったことはないけれど、いつだったかフィーリアがこの店の前で『一度でいいから、ここの服を着てみたいもんだわ』と言っていた。

たぶんわたしなんかじゃ手が出せないような高級店。

非常に入りにくいけれど、この店のオーナーはかなりの美人という噂、確かめる価値はありそうだ。

仕方ない

「……入ってみましょうか」

リン

ドアに付けられたこれまた高級そうなベルが、店の主に来客を告げる。

扉の中は思った通りのお洒落で可愛い内装。

その中央ではこの店にぴったりの美人が優雅にお茶をしていた。

「いらっしやいませ……って、あらやだわたしつたら、ごめんなさいね。お二人にもすぐお茶をお持ちしますわ、ゆっくり見てらして」

高級店ではお茶まで出してくれるのか、と呆けているわたしの前を通り過ぎ、美女はもう二人分のお茶を準備し始めた。

一見茶色に見えるウェーブのかかった長い髪は、光にあたると綺麗な金髪にも見える。小鹿のように大きな瞳も透き通った碧眼。

噂通りの美人オーナーだ。

これはもしかしたら、もしかするかも。

とグレンの方を見ても何だか無反応で、何やら店内の服ばかりを気にしている。

「グレン……あの女性は？」

「えっ、ああ……違うな」

また外れか。

「お待たせしました。何かいいものはありませんか？」

小さな溜め息は、お茶とお菓子を持ってきてくれたその美女の声にかき消された。

「いや、あの、わたしたち人を探してて……」

「これを貰おう」

「は?!」

突然話を遮ったグレンは、そう言ってマネキンが着ている黒のワンピースを指差した。

「まあお目が高い。そちらは昨日入荷したばかりなんですよ」

「そうか、タグは外してくれ。着ていくだろうか？」

「えっ、あの」

いきなり話をふられてしまい当惑しているわたしに、グレンは優しく微笑みかけた。

「今日の礼だ」

「え?! うっ受け取れないこんな高価な物!!」

先程ちらりと見えた値札は、いつも目にするものよりゼロが多い。

わたしは勢い良く首を横に振る。

「かまわん。今財布の中にあるのはおれが賞金首を捕まえて得た金だ、気にするな」

えーと、それは

つまり税金じゃないから気にするなと?

「そうじゃなくて……」

わたしにはお礼なんて受け取る資格がない。

いくらたつても尋ね人は見つけれられないし、むしろそのことを少しばかり喜んでいる自分がいる。

いつからこんな嫌なやつになってしまったんだろう。これじゃあ本

当にグレンの友人失格だわ……

「どうした？」

今にも泣き出しそうなわたしを、グレンが心配そうに覗き込む。  
わたしはあなたに心配してもらった価値もないのに……

そんな重苦しい雰囲気を壊したのは、素早くマネキンから服を剥ぎ取り、タグを外して、試着の準備万端で待っていたオーナーだった。  
「まあ、恋人からの思わぬ贈り物に感極まってらっしゃるのね」  
「えっ」

違う、違うから？！

しかも『恋人』って……

耳まで真っ赤になった顔を上げられず、その時のグレンの表情を見ることなく

わたしは試着室に連れ込まれた。



## 第十八話

「本当に良くお似合いですわ。せっかくですからお化粧品もしましよ  
う」

化粧台や洗面台まで揃う豪華な試着室ですっかり着替えさせられ、  
わたしはもうオーナーのなすがままになっていた。

「それにしても、素敵なお似合いですね。お似合いのカップルだわ」  
「だから違いますって!!」

着なれない服や化粧品で只でさえ顔が熱いのに、わたしの体温はまだ  
上がるらしい。

「ただの……友人です」

しかし、自分で言ったこの一言で一気に現実に引き戻される。

そう、わたしはグレンのただの友人……

あれ？

でも今のわたしは旧友『セツ』ではなく『セシリア』だ。

いくらヴァンの紹介があったとはいえ、今日会ったばかりの人間に  
グレンは非常にフレンドリーだった……ような気がする。

なぜだろう？

「わたしにはそうは見えませんでしたよ」

鏡越しに微笑まれて苦笑すると、もう髪も化粧もすっかり整えられ  
ていた。

ゆっくりと鏡の中の自分に焦点を合わせた瞬間、先程までのもやも  
やは一気に消えた。

薄く化粧ののった顔は先程の熱でうつすらと蒸気し、無造作に靡い  
ていた金髪は緩くハーファップされている。

「わたしじゃ……ないみたいだ」

「もとが良かったんですもの。それよりこの物騒な物はどうします

？」

オーナーは、香水や色とりどりの化粧品と一緒に不自然に台の上に乗っている古びた短剣を指差した。

「いつも身に付けている大切な物なんです。ないと落ち着かないから」

そう言つて、着替えの際に外されたそれを太ももに括り付ける。

柄や鞘の模様はすり減っているけど、手入れを欠かしたことがないのでまだまだ使える。サーベルや銃相手では歯が立たないのは分かってるけど、これはグレンに貰った大事な短剣だから外す訳にはいかない。

これは、出会つてすぐ

まだまだ王宮内の情勢が不安定だった頃に

『危ないから』

とグレンがくれた短剣。

実は宝物庫から勝手に持ち出して来た物だったらしく、グレンはその後

陛下やクロエ先生に散々怒られていたのを思い出して、くすりと笑みがこぼれた。

その後わたしも急いで一緒に誤りに行ったら、

陛下は苦笑しながら『しょうがないな』と許してくださったんだっけ。

「まあスカートで隠れるから大丈夫かしら。さあ、御披露目しましよっ」

え？！ちよつと待つて。

いざこれを見せるとなるとかなり恥ずかしい……

思い出に浸っていたら、すでに試着室のドアは開けられていた。

「お待たせしました。如何です？」

店内の中央にある椅子で、本日二度目のティータイムを楽しんでいたであろうグレンと目が合う。

「……………」

ああ、固まってるし。

基本的に無表情で、最近は公務以外で笑っている所を見たことがない。

でも、さっきの喫茶店で想い人のことを語っていた時は顔を赤らめてさえたのに、ちよっと着飾ったわたしを見て無反応なのってどうなの？

そりゃあ今は『セシリア』だから、グレンからしてみれば赤の他人だろうけど…………

そんなに可笑しいだろうか？

「グレン？」

「あついや…………よく似合ってるぞ。オーナー、すまないが靴も適当に見繕ってくれ」

「かしこまりました」

えーと、それだけっつ?!

社交界でご令嬢たちに言っているであろう

賛辞を期待していたわけではないけれど、あまりにもあっさりとした返答に多少気落ちしながら、用意されたピンヒールのブーツを履いてみる。

「こちらもよさそうですわね、よくお似合いですわ」

それを聞いてグレンは、立ち上がり会計を始めた。

「ではそれも全部貰おう。着ていた服は後で彼女の家に届けてもらえるか？」

「かしこまりました」

え?!

「本当にこのまま街に行くの?! オーナー、すぐにわたしが着て

た服返して下さい」

わたしは急いで抗議した。スカートなんて履いたのは数十年ぶりだし、こんなドレスみたいなワンピースとピンヒールのブーツ……絶対似合っていない、あまりにも恥ずかし過ぎる。

それにこんな高価な服を着ていては、いつ汚してしまうかと怖くて普通に歩けない。

しかし、どんなに抗議してもわたしの主張は受け入れられず、このまま店を出ることになってしまった。

そして結局、ここでも件の女性を見つけることはできなかった。

## 第十九話

街の中央は先程より賑やかになっていった。

セントレア自慢の海産物が並んだ市も沢山出てるし、広間では異国の踊り子が真つ赤なドレスを着て踊っている。その周りではしゃいでいる子供たちは、黒いマントを着て騎士団の真似事をしているようだ。

次第に山から吹く緑の風は潮風へと変わり、人混みの向こうの港には明後日の戴冠式のためにやってきた王侯貴族の華やかな船や、異国の商船が見える。

わたしはそんな中をグレンのかげに隠れるように歩いていた。

履き慣れないピンヒールのブーツで足も痛い、すれ違う人々の視線はもつと痛い。

「失敗したな」

先に行くグレンがぼそりつつぶやいた。

「ああ、大失敗だ。だから言ったでしょう？ わたしにはこんなの似合わないって。絶対女装した変態男と思われてるぞ」

「いや、そうじゃなくて……お前それ本気で言ってるのか？」

グレンは怪訝な顔でわたしを覗き込む。

「本気も何も……」

じゃあこの変な視線は一体何だっけ言うんだ？

「他の者に見せるのは惜しいぐらいに……その、なんだ」

「何？」

今度はわたしがグレンを覗き込む。

といつても、背丈があまり変わらないのであまりかわいらしいものではない。

案の定、グレンは口に手を当て急いで顔を背けた。

「いや、何でもない」

「？」

グレンはそのまま口を閉ざしてしまい、人混みを掻き分け裏道へと入って行く。

一体何を言いたかったのか分からないまま、わたしも急いで後を追った。

大通りから一本入ったその道は、先程とは打って変わって静かだ。

通行人は猫ぐらいで、両脇には家々の裏口が立ち並び、その戸口には薪やら空き箱やらがつまれて狭い道をより狭くしている。

「あの、グレン。ここは人探しには向かない道だと思うけど？」

「そうだが……あんなに人が多くては、いつ騎士団の者たちに会うか分からんだろうが」

はて

わたしは首をかしげた。

確かにわたしは困るけどグレンは…

「別に会ってもかまわないんじゃない？むしろ騎士団の方々に協力してもらったほうが効率がいいし、みんな喜んで協力してくれると思うけど？」

「ああ、喜んで協力してくれるさ。だがいいおもちゃにされるのが目に見えてる、仕事そっちのけで人探しに全力投球するぞ、おれをからかいながらな。ヴァンがいい例だ」

確かに

『仕事一筋なグレン団長の想い人探し』

なんて騎士団のみんなにとっては格好の餌だろう。

彼らは、グレンが『王子』だったことを分かっているのかいないのか非常にフレンドリーだ。

まあ、グレン自身が身分なんかに関係なく仕事ができるようにと勤めてきた結果なんだが。

そう思うと、何だかおかしくなってきたて笑みがこぼれた。

「おい、何をニヤニヤしてるんだ」

「いや、グレン団長はみんなに愛されてるんだなあと思って」

「なっつっ?!」

グレンは眉間にしわを寄せながら、耳まで真っ赤になっている。

が、次の瞬間その表情は酷く険しいものへと変わった。

「君の方こそ、随分噂になってるぞ。」

「噂?」

「ヴァンと……付き合ってるというのは本当か?」

「はあ?!」

思いもよらぬ言葉に思わず大声が出てしまった。

その声に驚いてグレンはびっくりと足を止め、わたしは勢い良く彼に詰め寄った。

「いったい誰がそんなことを?!」

「え? 騎士団の者たちはみんな言ってるぞ。街で二人で歩いているのをよく見るとか、楽しそうにお茶してたとか……」

わたしはひとつ大きな溜め息をついて、肩を落とした。そんな噂が流れてるなんて知らなかった。

確かに、ヴァンはわたしの秘密を知っている唯一の人物で、良き友人だけど……

一方的なライバル意識はあっても、付き合っているなどとてもない。

「グレン。騎士団のみなさんにお伝えください、くだらん噂を流す暇

があるなら仕事しろって」

「……」

グレンはしばらく呆然としてから、ゆっくりと口を開いた。

「…違うのか？」

「違う！！ わたしはっっ」

わたしはあなたが……



## 第二十話

言いかけて急いで口をつぐむ。

グレンには誰か想い人がいるのだ。

今何か言っても困らせるだけ。

分かってるけど……

わたしは俯いたまま顔を上げることができなかった。今日があったら、何かが口について出てきてしまいそうだったから……

そのまま黙り込んでいると、頭上からふわりと手が降ってきて、そのまま髪をくしゃくしゃにされてしまう。

「あいつらの話も当てにはならんな」

離された手を追って思わず顔を上げると、グレンが腕組みをして苦笑している。

わたしはそれに安堵して、ようやく冷静さを取り戻した。

「団長が…次期国王陛下が情報操作なんかされたらだめですよ」

「以後気をつけよう」

グレンからは先程までの険しい表情は消えていた。今はただ穏やかな微笑みをたたえている。

その表情が自分に向けられているかと思うと何だか妙に照れくさくなって、わたしは急いで話題を変えた。

「ところで、今探してる女性とはどこで出会ったの？」

「?!」

突然想い人の話になって、グレンは顔をかすかに紅潮させた。

傍から見れば至って冷静に見えるだろうけど、幼馴染のわたしから言わせてもらえば、グレンは酷く動揺している。

「話しかけたことはないんでしょう？」

「まあ……そうだな」

「じゃあ見かけたのはどこ？」

「……」

「グレン？」

グレンはしばらく黙っていたが、わたしがしつこく質問攻めにしたのでようやく重たい口を開いた。

「王宮だ、王宮」

「やっぱり?!」

「?!」

わたしの嬉々とした声にグレンは一瞬おののいたが、咳払いをしてすぐに体制を整えた。

「やっぱりって何だ、やっぱりって」

「実はわたしの友人にそれらしき人がいるんだ。王宮にも出入りしてるし、多分間違いないと思う」

そう『金髪碧眼の女性』と言われて、わたしには一人すぐに思い当たる人物がいた。

でも、言えなかった。

言ってしまったらすべてが終わってしまいそうな気がして。

一緒にお茶をしたり、買い物をしたり、二人で街を歩くだけで楽しかった。

デートみたいだっと思ってたのはきつとわたしだけ。

だから、早く終わりにしなければ。

今回の政略結婚はわたしにも責任がある。

グレンに好きな人がいるなんて知らなかった。

いや、きつとそんな人がいるなんて思いたくなかったんだ。

だからわたしは、この話を聞いてすぐに思い浮かんだその女性を頭

の隅に追いやっていた。

でもやっぱりだめ。

わたしはグレンが……好きな人が幸せなのがいい。

「フィーリアだ」

「フィーリア？」

「港の近くに酒屋があるだろう？」

「ああ、入ったことはないが……ん？ あそこは酒屋なのか？ 確かに酒もおいてるらしいが、武器でも宝飾品でも何でも揃うと聞いたぞ?!」

「それはわたしも謎だけど、今重要なのはそこじゃないだろ？」

「ああ、すまない。そうだったな」

「フィーリアはその一人娘で、よく王宮にも納品に来てるらしいからその時見かけたんだと思う。髪は金髪で、瞳の色は限りなく碧に近いグレーだ」

わたしはこれで少しはグレンの役に立てたんじゃないかと声が弾む。しかし、返ってきたグレンのそれは、いつの間にか暗くなってきていたセントレアの街の夜のように深く、そして寂しかった。

「そのフィーリア嬢が」

只でさえ暗い裏道に射し込む光は少なく、今はグレンの表情を読み取ることができない。

「おれが探している人物だと？」

「いや……まだ分からないけれど……」

わたしの声はどんどん小さくなっていく。

ああどうしよう。

何でもっと早く言わなかったんだって怒ってる？

いったい何を言ったらグレンは笑ってくれる？

喜んでくれる？

わたしはまた顔を上げることができなくなってしまった。

気まずい沈黙で、二人の間に静寂が流れ……

あれ？

……流れない

聞こえてきたのは遠くで飛び交う人々の声。

それもなんだか様子がおかしい。

「どうしたんだろう……」

「様子がおかしいな」

気まずい雰囲気は脱したけれど、今度は妙な胸騒ぎがする。

「行ってみよう」

「ああ」

駆け出したのは二人同時だった。

## 第二十一話

頑なに沈むのを拒む太陽が地平線を赤く揺らしている。

明るいのは遠くに見えるその地平線だけで、セントレアの街はそのほとんどが夜だった。

いつもなら街灯に灯りが点き始め、静かな夜が始まるはずなのに、今日は様子がおかしい。

行きかう人々は慌ただしく、港の方からは叫び声のようなものが聞こえる。

「何の騒ぎだ……」

事態を飲み込めないわたしたちは、港から走ってくる人の波の中から少年を一人捕まえた。

「うわ、何すんだよ!!」

「いきなりすまない。妙に騒がしいけど何かあったの？」

視線を落として少年を見ると、走ってきたせいか顔が紅潮している。

「何があつたんだ？」

しばらくぼーとしていた少年は、わたしの後ろに仁王立ちしていたグレンにせかされてようやく口を開いた。

「海賊が出たんだ」

「「海賊?!」」

まさか……

わたしたちはしばらく啞然としていた。セントレアの海に海賊が出るなんて前代未聞。

いや、わたしやグレンが生まれる以前は海賊たちが跳梁跋扈していたらしい。

けれど、当時最強を謳っていた海賊の一味とセントレアの王子  
グレンの父上である当時の国王陛下が手を組んだことで、他の海賊  
たちはセントレアの海で暴れなくなった。

もうその海賊の一味は解散してしまっただけで、その海賊に  
敬意を表し、『セントレアの海では海賊行為を行わない』という暗黙  
の了解は、今も続いているはずだった。

それがまさか破られるなんて？！

……いや、わたしのせいだ。

賊の侵入を許してしまった……

暗黙の了解に胡坐をかいて海上警備が甘くなっていたのだ。

これではグレンの友人どころか、騎士団の隊長としても失格だ。

思わず涙が零れ落ちそうになって、天を仰いでからまた少年へと視  
線を落とす。

「引き止めてすまなかった、早く安全な所へ避難して」

「そんな心配すんなよ、姉ちゃん。きつと騎士団の兄ちゃんたちが  
海賊なんかすぐやつつけちまうよ」

不安げなわたしを見て少年は誇らしげに答えてくれた。

やばい、今度は感動して泣きそう。

「そうだね」

少年はまた人混みに紛れて走っていく。わたしはその小さな影が見  
えなくなるまで見送って、港があるセントレアの海に向き直った。

「行こう、グレン」

「おい」

走り出そうとした瞬間、おもいつきり手を掴まれた。

「うわっ、何?!」

「何じゃない!! 君はこっちだ」

そう言っただけでグレンが指指したのは、港とは全くの反対方向。

……しまった。

わたしは今『セシリア』だった……

「えーと……大丈夫、こう見えてけっこう強いんだ。それにフィリアが心配だし。ほら、酒屋が港の近くにあるだろう？」

「駄目だ、フィリア嬢のこともおれが引き受けよう。とにかく早く避難しろ！！ いいな？！」

「ちよつとまっー」

そう言つて港へと走つていくグレンを追おうとした瞬間。

「……つつ痛い」

顔から豪快にその場に倒れこんだ。

ブーツのヒールが、煉瓦造りの地面の隙間にはまつてしまつたらしい。

履きなれないものを履くもんじゃないな。

おかげでグレンを見失つてしまった。

「はあ」

思はず出てしまったため息は、滑稽な今の自分にか先程のグレンの台詞にか分らない。

『フィリア嬢のこともおれが引き受けよう』

これでいいんだ。フィリアがすでに避難して無事でいてくれるのが一番だけど、もし何かあつてもグレンがきつと彼女を助けてくれるだろう。

運命の出逢いには、もつてこいのシチュエーション。

わたしの役目は本当に終わつてしまった。

目頭にこみ上げる熱いものを堪えて、地面に突っ伏したまま港の方を見る。

火が上がっているのか、騎士団の他にも消防隊の姿が見えた。おまけに、叫び声と一緒に銃声まで聞こえてくる。

わたしの役目は本当に終わったの？

……いや

『わたし』の役目は終わったかもしれない

でも『おれ』の

『セツ』の役目はまだ終わってない！！

「ちょっとすいません！！」

地面に刺さってしまったブーツを脱ぎながら、商人らしき男性を引き止める。

「うわっ?! 大丈夫かいお嬢さん、随分派手に転んじまったねえ」

「ええ大丈夫です。それより、靴って売ってます?」

「は?」

「何でもいいんです、ヒールが低くて走りやすいやつ」

「売ってるには売ってるけど……今買うのかい? 早く避難した方がいいんじゃない?」

「引き止めてすみません。でも、どうしても必要なんです、これで足りえます?」

差し出した現金を見て、男は抱えていた大きな麻袋の中から靴を何足か取り出してくれた。

さすが商人。

「異国の品だよ。底がゴムで出来ててね、丈夫で長持ちだし走りや



すい。いやあこれは絶対売れると思ったね」

「じゃあそれで、お金足りない分は騎士団に請求してください」  
「は？」

言いながら急いでその靴に履き替える。

やたら紐が多いけど足にフィットして随分履きやすい。地面に突き刺さったままのブーツは後で回収にこよう。

「よつと」

立ち上がると、いつの間にか足は血だらけになっていた。

ドレスのような服にこの靴は幾分ミスマッチだけど、まあ仕方ない。その服も今はぼろぼろだし。

「おじさん、ありがとう。わたしもこれは売れると思うつよ」  
そう言い残して港へと急ぐ。

嘘偽りのない姿で

あの人の元へ

## 第二十二話

「困ります！！　ここから先は現在立ち入り禁止です」

港に着くと人、人、人。

避難していたのはごく一部だったようで、血気盛んなセントレア国民は久々の有事の現場に殺到している。

その人垣の向こうに、野次馬を止める騎士学校の少年たちと、その教官が目に入った。

何度か剣術指導に行った事があるので見知った顔も多い。

どうやら実地訓練もかねて、今回の騒動に借り出されているようだ。人垣の間を抜け、こっそり紐をまたいで現場に向かおうとすると、当然のように止められる。

「すみません、危険ですのでここから先は入らないで下さい」

まだあどけない、騎士学校の制服を着た少年が必死に懇願する。その顔には覚えがあった。

「君は確か……フェルナン＝コールデン？」

剣術指導の時に見た顔だ。

「え？　なんで僕の名前……」

困惑する少年を横目に、すばやく彼の腰にささっている剣を抜き取った。

「ちよつと借りるよ」

「ああっつ、困ります返してください！！」

「隊長命令には逆らえませんでしたが、とかなんとか教官には言っておくといい。後からわたしもきちんと説明しておくよ」

「え？……ええ？！」

依然として困惑したままの少年を尻目に、わたしは奪った剣を片手に紐を飛び越え現場へと駆け出した。

ごめんね、フェルナン少年。

\*\*\*

「フェルナン！！ 何をしている！！ 一般人を侵入させるなどあれほど言っただろうがっつ！！」

フェルナンの頭を一発殴ってから、教官は急いで女性の後を追おうとした。

が、フェルナンは必死に教官の袖をつかみ、引き止める。

何て言えばいいんだろう？

引き止めてはみたものの、フェルナンには先ほどの女性を何と言えはいいのかわからなかった。

「……一般人では……ありませんでした」

やはりこうとしか言いようがない。

「はあ？！ どっからどうみてもいいとこのお嬢さんだっただろうが！！ 早く連れ戻しに行くぞ！！」

当然、教官からの檄が飛ぶ。フェルナンは涙ながらにそれに耐え、もう一度先程の女性と、自分が尊敬してやまない隊長の顔を思い浮かべた。

「でも教官、あれは……セツ隊長でした！！」

「はあ？！」

\*\*\*

かくしてフェルナン少年の無実が証明されるのはもうしばらく後になる。後方でやり取りされていたその会話は、わたしの耳にはもう入っていないかった。

ただ目に映るのは眼前の海賊船のみ。

といっても、商船を装っているようで一見すると分からない。

しかし、その船のまわりには剣を交える騎士団と、海賊らしき男たちでごった返していた。

おまけにどこからともなく弾丸も飛んでくる。  
ひとついい事を挙げるとすれば、みな目の前の相手に夢中で、場違いな女が一人紛れ込んでいるのにまだ気づいていない事だ。

よし。

わたしは深く一呼吸してから、船へと続く階段を目指しその中へと飛び込んだ。

「退けっつー!!」

その声に、その場にいた全員の動きが止まる。

しかし、その一瞬の静寂も、すぐに海賊たちの失笑に変わってしまった。

「おいおい、ここはお嬢さんが来る所じゃねえぜ」

「それともセントレアの騎士団は、こんなお嬢さんの助けを請わなきゃいけないほど弱っちいのかい」

「違いねえ」

海賊たちの乾いた笑いに、騎士団のみんなは穏やかではないはずだ。もちろん彼らはそれを表に出す程愚かじゃない。

そんなことより、紛れ込んでしまった一般人女性の救出に、頭をフル回転させてくれていることだろう。

わたしは静かに首を横に振った。

「その必要はない」

ぼそりと呟いてから、先程から暴言を吐いている海賊たちに剣を振りかざす。

一人一撃。

油断していたのか、彼らはやけにあっさりとその場に倒れ込んだ。  
わたしは振り返ることなく、船へと向かう。

「……」

一瞬の沈黙の後、海賊たちの殺気は一気にわたしへと集中した。

「貴様っつっ!!」

振りかざされたすべての剣を軽くよけ、向かってきた海賊たちを薙ぎ払う。

アトラスの剣は重い。

『斬る』のではなく、その重さで『殴る』のだ。

相手に致命傷を負わせることはないが、その分自分の手首への衝撃が大きい。

手首に少しばかりの疲労を感じてきた頃。

その場に立っている海賊たちは半数になっていた。

そのほとんどが、ただ茫然と立ち尽くしているだけで向かってはこない。

「応援はいらない、救護班を呼んでください。怪我をしている者はすぐに離脱すること」

わたしは、同じく先ほどから茫然としている騎士団に向かって静かに語りかける。

「海賊はすべて捕縛し、すぐに事情聴取を開始。怪我をしている者は騎士団だろっつが海賊だろっつがきちんと治療を受けて下さい」

みんな、薄々わたしが誰なのか感付いているようだ。  
わたしは乱れた金髪の長い髪と、もうぼろぼろになってしまった黒  
のワンピースをなびかせながら続けて言った。

「今一度、海賊たちに武術大国セントレアの王宮騎士団の力を知ら  
しめよう」

静かに微笑んでから、デツキへと向かう。

許してもらおうとは思ってない。

よくも騙してきたな、と蔑んでくれてかまわない。

自分のしてきたことに後悔はない。

この体で詫びることしか、わたしにはできないから。

今一度、剣を取る。

## 第二十三話

先程の会話が聞こえていたのか、階段を上がってすぐのデッキにいた騎士団はみな茫然としていた。彼らと対峙していた海賊たちも、先程の様子を見ていたようですっかり戦意を失っている。

一步を踏み出すたびに人が避け、自然とわたしの前に道ができてしまった。

だまってその中を進んでいると、それでも数人の海賊が行く手を阻んできた。

「退け」

言うのと同時に剣を振りかざす。

数分でそのすべてをなぎ倒し、グレンを探しにまた奥へと進んだ。

けどその前に現状を知りたい。

「すみません、誰か状況報告を」

いつものように報告を待ったけど……

「……」

返事はない。

いきなり『セツ隊長』が女の格好で現れたのだ。

今まで通りにはいかないよね。

仕方がないかとそのまま足を進めようとした時、後方から声がした。

「申し上げます!!」

海賊と剣を交えながらそう言ったのは、一番隊のキュリオ「ヴォイツ」だ。騎士団のムードメーカーで、しょっちゅうヴァンとつるんで馬鹿をやっては、グレンに怒られてたっけ。

でも腕は確かで、今もあつという間に相手にしていた大柄な海賊をねじ伏せた。

「本日午後五時頃、港の酒場で暴れていた数名の男を連行しようしたところ、不覚にも店員と店内にいた客数名を人質にとられ、この船に逃げられました」

キュリオは海賊に縄をかけながら、それでも話を続けてくれる。

「船体を調べてすぐに海賊船と判明したので、一番隊と三番隊で突入し現在に至ります」

茫然としていた他の騎士団も、徐々に戦闘に戻り始めた。出遅れた海賊が少し不利だ。

「人質は？」

「船内にいるもようです。駆けつけてくださったグレン団長と、あと数名が船内への潜入に成功していますが、その後連絡がありませんん!!」

「了解した。それとキュリオ……」

言いながら、一番近くにあった船内への扉を開ける。

「何でしょう？ セツ……隊長？」

戸惑いながらもそう呼んでくれたキュリオを振り返って、その視線を彼の右足へと移す。

「無理はするな、報告ありがとう」

そう言い残して、私は船内へ進んだ。

\*\*\*

「ばれちゃうんだよな、あの人には」

キュリオはぼそりと呟いてから、その場に座り込む。

「おい、キュリオ……その足どうかしたのか？ 見せてみる」

心配そうに近づいてきたのは三番隊のレン＝ロックだ。

ズボンの裾をめくると、その足は赤黒くはれ上がっていた。

「いつやった？」

「たぶん……酒場で」

レンは深くため息をついてから、キュリオを右に彼が捕縛した海賊



を左に担いで船を下りた。

「いつも隊長に言われてるだろ、無理はするなって」

「ああ」

船の周りにいた海賊たちは、もうそのほとんどが捕縛され、連行されていくところだった。

後はデッキと船内にいるやつらだけ。

あの人 came たんだ、それももうじき片付くだろうな。

その考えに至ったレンは、たぶん同じ事を考えているであろうキュリオに、思い切つてあの人のことを聞いてみた。

「なあキュリオ、さっきのって……」

「セツ隊長だよ」

レンが言い終わる前に、キュリオは穏やかな笑顔で答えた。

「……ああ、そうだな」

\*\*\*

## 第二十四話

船内は薄暗く、人ひとり通るのがやっと。

その中を息を殺して進んでいると、いきなり暗闇から誰かが斬りかかってきた。

「うわっっ?!」

「ーやばい。」

船内の狭さでとっさに剣を構えることができず、額から嫌な汗が流れる。

「ん？ 女じゃねえか。おーい、見張りのやつは何やってんだ、人質が逃げ出してるぜー」

……へ？

暗闇に慣れてきた目が捕らえたのは、大柄でけむくじやらかな男。最初こそ凍りつくような殺気があったものの、私が女だと分かった瞬間、彼は全くの無警戒になってしまった。勘違いしてくれたのは嬉しいけど……これで大丈夫なのか?!この海賊団？

まあ、今は流れに身を任せたほうが得策かも。

「すみませーん、お手洗いに行きたくて」

精一杯女らしく言ってみただけど……これでいいのか？

「しょうがねえな」

薄暗くて表情は分からないけれど、どうやら成功したらしい。わたしは後ろに隠していた剣をゆっくりと床に下ろした。

幸いにも、この暗さのおかげで彼はわたしが剣を持っているのに気づいていない。

後について人質がいるであろう部屋に向かっていると、時々途中の部屋から剣や銃を持った男たちが、狭い通路に顔を出してきた。

「わたしは逃がしてませんからね」

「おれでもねえからな」

「どうせおめえだろ？」

「何だつて?!」

「はいはいつと」

武器を手放したのは惜しいけど、この敵陣の中を一人で進むのはまず無理だ。

グレンやみんなは無事だろうか。

「おい」

そんなことを考えていたら、いつの間にか目的地に着いていた。

「もう勝手に出歩くなよ、危ないからな」

そう言つて、目の前にあつた部屋に押し込まれる。扱いは乱暴だけど、意外と女性には紳士なのね。

背中をさすりながら、押し込まれた部屋の中をゆっくりと見回すと、そこは窓もない。通路よりも薄暗くて少し気味が悪い。

食料庫か何かだろうか……その奥からは数人の泣き声が聞こえた。

「フィーリア？」

暗がりの奥でどこそこと動いていた影の一つに声をかけると、それはゆっくりとこちらに近づいてくる。次第に見知ったシルエットになつてきて、わたしはほっと胸をなで下ろした。

無事で良かった……

「えつつ？ セシリア?! どうしたの、あんたも捕まっちゃったの？」

フィーリアは驚きを隠せないようで、おもいつきり私の肩を掴んで

揺すつてくる。

「いや、ちよつと違うんだけど……今度ちゃんと話すよ。それより無事で良かった」

人質になつていたのはフィーリアを含めて5人。みんな酒屋で働いている年若い娘さんで、身を寄せ合つて部屋の隅に固まっていた。怪我もないようで、ひとまずは安心。

でも、この人数を一人で連れて逃げるのを考えると少し辛い。

「フィーリア、他に誰か来てない？ 騎士団とか？」

「騎士団？ ……あつ！ さっき扉の向こうでグレンさまっぽい声でしたわ。わたしね、いい男は声もちゃんと覚えてるのよ」  
そう言つてフィーリアは自慢げに腰に手を当てる。

それを聞いて、他の女性たちからもくすくすと笑い声が漏れた。みんな少し余裕が出てきたようだ。

「でもすぐに慌ただしくなつて……何だか怖かつたわ。やっと静かになつたと思つたらセシリアが来てびっくりよ、もう」

「そうか、その人たちがどこに行つたか分かる？」

「え？ ……そうね、もっと奥の方に行つたんじゃないかしら。入り口の方から海賊たちの声がしたから、追い込まれてしまつたんだと思つわ」

「だよな……ありがとう」

私は左手をさつと挙げて、扉へときびすを帰す。

「ちよつとセシリア！！ どこ行くの?!」

「大丈夫、すぐ助けに戻つて来るから。今はあの人の……もう最後だから、あの人の所へ行かせて」

「……セシリア？」

私は扉を蹴破つた。

## 第二十五話

人質を閉じ込めていたはずの部屋から聞こえた異様な破壊音に、海賊たちが集まってきた。

わたしは血まみれの足でそれを振り切って、奥の部屋を目指す。

「グレン……」

最後だから

「グレン」

もう友人には……セツには戻れない。

セシリアとして側にいることもできない。

やっぱりグレンが探しているのは、フィーリアだ。

よく手入れされた綺麗な金髪に、澄んだ碧眼。わたしの短髪の髪に押し込められたぼろぼろの金髪とは大違いで……

彼女の美しさはどこの姫君にも引けを取らないし、中身もわたしが保障する。

王子様が囚われの御姫様を助け出して物語はハッピーエンド。

それでいいじゃないか。

わたしは王子様の従者A……いや、ここはせめて騎士Aで。

彼の助けになりたいんだ。

幸せになって欲しいんだ。

「グレンっっ!!」

力いっぱい叫びながら一番奥の扉を蹴り飛ばす。

「グレンっっ!!」

部屋にいた全員の視線が一気に集まった。

「セシリアか?! 阿呆が……早く下がれ!!」

数名の海賊を相手にしていたグレンと目があったのは一瞬で、その顔は珍しく動揺しているように見えた。

けど、それを確める間もなく彼はすぐに戦闘に戻ってしまった。

いや、戻らざるを得なかった。

少し広めのこの部屋は、おそらく船長室。海賊が数十人とグレンを含めた騎士団が三人で、確か二人はまだ入団したばかりの新団員だ。グレンはまだ戦闘に不慣れな新団員のフォローをしながら、今度はそこに来てしまった『セシリア』まで守らなければならない。

確かに『阿呆』だろう。

ここに来てしまったのが……

「セシリアならね」

そう呟くと同時に、スカートの下に隠しもっていた短剣で、まず一人。

扉のすぐそばにいた男は恐らく、一瞬の出来事に何が起こったのかわからないままその場に崩れ落ちた。

間髪を容れずに短剣を振るい、もう一人二人と倒していく。

少女が海賊を薙ぎ払う、その異様な光景に新団員二人と数名の海賊は呆然としていた。

ただ、船長と思われる男とその他大勢の海賊を一人で相手にしていたグレンはこちらを見ようとはしない。

時々『早く下がれ』と言うばかりだ。

けど……ここまでやってしまっただけは、さすがのグレンももう気付いているだろう。気付いていて下がれと言っているのだろうか。

もう『セツ』も必要ないの？

グレン……

ドスッ

その瞬間。

ふと気を抜いてしまったほんの一瞬。

突然視界が暗くなったと思ったら、目の前にグレンがいた。

一瞬の隙をついて

わたしの死角に入り込んでいた海賊から……わたしを庇って

赤黒い液体を流しながら立っているグレンが。

「防具も……つつ……けずに、くるやつがあるか……あほうか……」

「い……やっっ……グレン……！」

嘘、



## 第二十六話

薄れていく意識の中で、あいつの……

『グレンがわたしを庇ってどうする!?!』 『馬鹿っっ』 『阿呆っっ』  
と言った罵声が聞こえる。

一応おれは王子なんだが、と反論しようとした瞬間。  
おれ『グレン・テレシア・セントレア』の意識は完全に途切れた。

\*\*\*

「わたしはグレン王子の剣術指導もしてるんですよ。ふふふ、常々セツさんと王子は良き友人、良きライバルになると思ってたんです!! それで、ぜひ王子の剣術のお相手にと陛下に頼んでこちらに連れて来てもらったんですよ」

下の方からクロエの声が聞こえる。

見下ろすと今より少し若いクロエと、まだ幼いセツがいる。

これは夢か。

いや、死の間際に走馬灯のように過去の記憶が蘇るっていうあれか。

「クロエ……そいつはだれだ」

二十歳のおれの意志を全く無視して、まだ幼い自分が口を開いた。

懐かしい。

これはセツと初めて会った……確か12年前

この頃のおれは酷く荒んでいた。

西の大国セントレア（田舎だが）のたった一人の王位継承。

父は後妻を娶らないと公言している。

『グレン王子』がいなくなれば、誰でも王位につける可能性があるがあった。

そういうわけで、俺は親戚一同はもとより他国からも命を狙われており『毒殺・暗殺』それはまだ幼い少年が、軽く人間不信に陥るには十分な程に日常茶飯事で行われていた。

クロエをはじめとした騎士団のおかげでそれらはすべて未遂に終わったが、気づけば周りは護衛の大人ばかり。剣術の相手もまたしかりで、王子に怪我をさせてはいけないと誰も本気で相手にはしてくれない。

そこでクロエが連れてきたのがセツだった。

同い年ぐらいの華奢な少年。風に揺れる金髪と、真っ直ぐに見つめてくる深い碧眼があまりにも綺麗で目がそさせなかった。

でも油断できない。

今まで出会ってきた同年代の子供たちはそのほとんどが暗殺者の手先で、持ってきてくれたお菓子が毒入りだったり、いきなり真剣で斬り付けてきたりと悲惨なものだった。

いくらクロエが連れてきた奴だとしても、すぐには信用できない。またすぐに裏切られるだけだ……だから。

殺される前に殺ってやる。

「5本勝負だ、行くぞー！」

## 第二十七話

「お前……強いんだな」

疲労と共に沸き起こったのは、なんともいえない感情。

セツはただただ真っ直ぐにぶつかってきてくれた。

変な遠慮も、殺意もない。

勝負には負けてしまったが、なんだか楽しくてしょうがなかった。

そのまま、疲れているであろうセツを引っ張り回して遊ぶ……予定だったのだが、クロエに見つかってあえなく断念。おまけに父に呼び出されてしまい、執務室へ行くことになってしまった。

\*\*\*

「父上、どういった御用でしょう？」

早く済ませたくて早口でそう言っていると、父は満足そうな笑顔で俺の頭をくしゃくしゃにした。

「いや、セツとは仲良くやれそうかと思ってね。その分だと大丈夫そうだな」

「セツは……また来てくれますか？」

一瞬、父は顔をそらして頭をかいた。

「それがなぜかアルが渋ってねえ、お前からも頼んでみておくれ」

「アルさんに？」

「セツの父親がアルなんだよ」

アルさんは父の昔馴染みで、よく王宮にも出入りしていたので何度か会ったことがある。剣術指導をしてもらったこともあったが、俺と同じ年ぐらいの息子がいるなんて話は聞いたことがなかった。

「俺……嫌われてるのかな」

「『お前の息子にしては良くできたやつだな』と珍しく褒められたよ、心配いらさないさ」

「では、俺からもお願いしてきます。またセツを連れて来て下さい  
つて!」

「ああ、行つておいで」

\*\*\*

全速力で中庭に戻ると、セツの側には既にアルさんがいた。急いで  
出て行きたかったが、先程の考えに足が止まる。そのまま中庭の柱  
の陰に隠れていると、微かに二人の話声が聞こえてきた。

「……あのなセツ、女の子は王子と友人になつたり剣術の練習相手  
になつたりしてはいけないんだよ」

え？

「“おとこのこ”だつたらいいの?」

「うーん」

「じゃあわたし……おれ、きょーからおとこのこになるよ。それな  
らいいでしょ?」

は？

俺は非常に混乱していた。

今まで周りに殆ど女性がいたことがなかったので、はつきりいつて  
女の子がどういうものなのか全く分らない。セツは……『女の子』  
なのか? すぐに男の子になれたりするものなのか? そんな馬

鹿げた話……。

セツが女の子だからアルさんは渋ったんだろうか。

いや、そんなことはどうでもいい。

セツがセツなら。

また会いたいと言ってくれるなら。

会いたい。

駄々をこね、その場に座り込んで動かないセツの肩越しにアルさんと目が合ってしまった。

『グレン王子に女性を近づけてはいけない』という暗黙の了解があるのを聞いたことがある。

彼は暗黙の了解を破ったことがばれ、俺はそれをこっそり聞いてしまった。

一瞬気まずい雰囲気 flowed が流れたが、彼はにやりと笑い、セツの手を引いて帰路につこうとした。

まずい。

「セツっつっ！！！」

俺の声にセツが振り向く。その顔がぱあっと明るくなったような気がした。

「もう……帰るのか？」

俺の願望がそんな風に見せたのかもしれない、けど

「うん……」

セツにまた会えるなら、どんな秘密も嘘も知らなかったふりをする覚悟はある。

だから。

「また来い……絶対来いよ!!」

セツを見て、それからアルさんへと視線を移すと、その顔は新しい玩具を見つけた子供のような表情だった。

「グレン王子。セツをまたどうぞよろしくお願い致します」

やられた、この人絶対面白がってやがる。

## 第二十八話

翌日、笑顔でまた王宮にやってきたセツを見て泣きそうになった。

嘘に嘘を重ねていくのは苦しい。そんな思いをこれからセツにもさせてしまうのだ。

けど……それでも一緒にいたかった。

そんなことを心配してやれる程大人になんてなれなかった。

ただただ良く見られたくて、剣も武道も、帝王学だの経済学だのものがむしゃらに学んだ。

おれがやればやる分だけ、いや、それ以上にセツもやるので本当に大変だった。

セツが女の子だとばれてしまっただけはもう二度と会えないかもしれない。それが最初は気が気ではなかったが、彼女の並はずれた強さ故にか一向に誰も気づかない。

良き友人、良きライバル。それ以外の感情は、一緒にいるためにひたすら隠し通すしかなかった。

出会ってから一年ほどたったときだろうか。

遠くの廊下で、侍女たちが恋人からの贈り物に浮かれているのを見て、セツにも何かやりたくなり王宮の宝物庫を漁りまくった。

目についたのはよく手入れされた短剣。

本当はきらきらと輝く首飾りやドレスを送りたかったのだが、友人（男）に送るには些か妙だ。

孤独で冷たい王宮に一人ぼっちでいた俺を救ってくれたように、今度は君に何かを返したい。感謝の気持ちとお守り代わりに、そしてひたすらに隠している思いと一緒にセツに渡した。

後で宝物庫を荒らしたのと、実は国宝級だった短剣を持ち出してい

たことがばれて色んな人に怒られたが、短剣を渡した時のセツの笑顔ですべて相殺だ。

そして2年前。

この頃からおれは、大臣たちに混ざって会議に参加したり、列国を訪問したりと政務にそれは熱心に取り組んだ。王侯貴族以外の者とも親しくしているのをよく思っていない大臣たちや、隙あらばと狙ってくる列国の者たち、誰からも認められる王になるために。セツに嘘をつかせなくてもいいように……

忙しさに比例して、セツとは以前のように頻繁に会えなくなってきたが、お互い交友関係も増えて大人になってきたのだし、仕方がないことだと思っていた。だから良好な関係を築けていると思っていたのだ。

例え俺が一番望んでいる関係ではなかったとしても。



## 第二十九話

それが思い上がりだったと気付いたのは、数日ぶりに隣国の視察から戻ってきた時のことだった。

自室に戻って荷解きをしていると、窓からセツとクロエが剣を交えているのが見えた。その光景が羨ましくて、そこに自分がいないのが悔しくて仕方ない。

気付いた時には荷物を中途半端に投げ出して部屋を出ていた。

「おれも随分と小さいな」

誰に言うでもなく、一人そんなことを呟きながら早足に廊下を進んでいると、向こうからクロエがやってくる。

「グレン様！！ お帰りなさいませ。今日お帰りだと分かっておりましたらお迎えに参りましたのに、このような格好で申し訳ありません」

簡易な訓練用の隊服を申し訳なさそうに整えながら、クロエは満面の笑顔で出迎えてくれる。

この一見優男が、一国の元帥殿だと誰が信じるだろう。

「かまわん。セツと手合せしていたようだがもういいのか？」

「はい、大会前の最終調整ですから。あんまり長くしましても、ね」

「は？」

おれの怪訝な声にも、クロエは相変わらずの笑顔で答える。

「武術大会に出場するための最終調整ですよ、グレン様が推したのでしょうか？ セツさんはまだ未成年ですがやる気と実力は十分ですし、もしかしたら優勝もありえるかも……ってあれ。うーん言っちゃまずかったですかねえ」

クロエが最後まで言い終わる前に、おれはセツの元へと駆け出して

いた。

「セツつつ!!」

久しぶりに会えたことに、一瞬表情が緩む。

それを急いで引き締めて問いただすと、セツはしれっと先ほどの話を肯定した。

なんでこいつはこう危険なことを買って出るんだ。

おまけにクロエ、クロエと……

そんなにあいつに認められたいのだろうか？

もし優勝でもして騎士団に入れば、クロエとの時間は増えるだろうが、おれとはきつと今以上に会えなくなる。セツのなかで自分の存在がどんどん小さくなっていくことに落胆しながら、足はクロエのいる軍部へと向かっていた。

扉を開けると、既に着替えてきちんと正装したクロエが、書類の山と格闘している。

「グレン様？　どうかありませんか？」

「申し込み用紙をくれ」

「はい？」

「まだあるだろう？　武術大会のだ。主催は王宮だが運営は軍部であるっ？」

一瞬の沈黙の後、クロエは頭を抱えてため息をついた。

「お渡ししかねます。次期国王陛下を危険にさらすわけにはいきません」

「次期国王が出てはいけないという決まりはない。”グレン王子”が出席することで話題にもなるし経済効果も上がるだろう。それにおれもクロエ元帥から教えを請うたのだ、そう易々とやられはせん。クロエはまたひとつ大きなため息をつく。

「セツさんに対抗心を燃やすのは大いに結構ですが、今回は頂けませんよ」

「……」

今おれが対抗心を燃やしているのはクロエであってセツではない。そんな嫉妬が恥ずかしくなり、押し黙っていたら、クロエがもう一度ため息をつく。

「まあ、言っても聞かないのは承知しております、確かに話題にはなりそうですね」

セツさんにはれたら絶対反対されると思いますので、秘密ですよ。とクロエから念押しされて、急いで申し込み用紙に記入した。

## 第三十話

件の武術大会で、おれはなんとかセツに勝ち優勝することができた。まさか同じブロックになるとは思っていなかったので驚いたが、徐々に本気でやりあえて楽しかった。

少しはいい所を見せられたのでは？と思っていたが、セツは負けたのを悔しがるばかりで……

あいつのなかでおれは所詮ただの友人、ただのライバルなのだと落胆しながらも、優勝のオプシオンでついてくる王宮騎士団長の任を拝命し、同じく騎士団へ入団の決まっていたセツの側で地道に努力していくことにした。

騎士団へ入団すると、場内にある騎士団の寮へ入らなければならぬ。

セツが城へ来てくれたのは嬉しいが、あいつはあんな男所帯へ放り込まれた後どうするつもりだったのか……入団後すぐは2・3人の相部屋が常だ。おれが寮で生活するという案は、大臣たちによって早々に却下されたので、騎士団長の権限を使い色々理由をつけてセツは一人部屋にした。

「お前の努力の方向は間違ってるぞ」と突っ込みを入れてきたのは、他のブロックで優勝していたヴァン。数少ない同年代の出場者という点もあり、大会の待合室ですぐに打ち解けた男だ。

その時はおれが王子だと知らなかったらしく、後から知ったときは随分驚いていたが、その後も態度を変えないでいてくれる。

セツのことも「あの子女の子じゃないのか？知り合いなら紹介してくれよ」と大会中しきりに聞いてまわっていたので、一発殴つてから……

全てを話してしまった。

セントレアでは女性騎士の前例がなかったが、傭兵をして各国を渡り歩いてきたヴァンには、男装をして出場していたセツがどうもひっかかったらしい。

そろそろ腰を落ち着けたいと話していたヴァンも、大会の出場理由は騎士団へ入団することだった。

騎士団の中に一人は理解者がいた方が、きっとセツのためになるだろう。そう自分に言い聞かせて、秘密を話してしまったことへの罪悪感から必死で逃げた。

なぜこんな大事な話をしてしまったのか自分でも分からない。

でも、もう限界だったのかもしれない。

誰かに話して楽になりたかった。

クロエのために必死で強くなるうとしてしているセツを見るのはつらい。いつそ全てばれて普通の女の子に戻ってくれたらいい。

そしたら無理やり妃に召し上げて、王宮の一室に閉じ込めてしまえるのに。

ただ、それはひどく空しく。そんなことを一瞬でも考えてしまった自分に腹が立った。

このままずっと友人でもライバルでも何でもいい。

セツが側にいてくれたなら、きっと自分は何者にもなれると思っただ。

ひどく自分勝手な思いを噛み締めながら、もう誰にもセツの秘密をばらすものと固く誓った。

あいつがいなくなるのは、まだ耐えられそうにない。

## 第三十一話

そして昨日。

久々に時間が取れたので、セツに練習相手をするよう言付けた。楽しみに鍛錬場で待っていたのに、あいつは遅刻してきた上に「婚約者を選んでおいた」などと爆弾発言を残してその場から立ち去ってしまった。

一瞬頭が真っ白になったが、呆けてはいられない。

その後急いで件の婚約者殿とやらに断りを入れに行っただが、とんでもない条件を突きつけられた。

『では、この機会にその女性に思いを告げてみてはいかがですか？

そうだわ。戴冠式までにその女性に思いを告げて、わたくしにも会わせて下さいな。それを婚約破棄の条件として提示します』

おれはヴァンが言っていたように、努力の方向を間違えていたのかもしれない。

好きな相手に政略結婚の手筈を整えられた上に、その婚約破棄の条件が、その相手に思いを告げて連れてこい？

結果は目に見えているではないか。

これは最後通告なのかもしれない。そろそろこの思いに決着をつけなくてはいけない時がきたのだ。

そっと思いを告げて、終わらせよう。

セツが女性だと知っているのはおれとヴァンだけだ。

今まで通り秘密にしていくと伝えれば、これからは騎士団で働いていけるだろう。

すぐ側でクロエのためにどんどん強く、そして綺麗になっていくセツを見ていくのはつらいが、友人として見守り続けることぐらい許

されるだろうか。

とりあえず、目の前の政略結婚を断るべく、適当な「思い人」役の女性を街で雇うことにした。

セツに思いを告げるのは、すべてが片付いてからだ。

おれも着いて行くと言って聞かないヴァンを宥め、自分の気持ちもなんとか落ちつけてその日は眠りについた。

そして、今日。

いらんと言ったのに、仕事を途中で抜け出してきたヴァンに「助っ人を用意するから」と言われて無理矢理街外れの店で待たされた。

が、待ち合わせ場所にヴァンが連れて来たのは「セツ」、いや「セシリア」だった。

とりあえず、セツがセシリアだとは気付かないふりをしておいたが、訳が分からない内にどんどん話しは進んでいき、いつの間にか「グレん王子の思い人探し」などと言う話になっていた。

セツはその助っ人？

「ふざけるな、おれが好いているのはセツだ。目の前にいる相手をどうやって探せというのだ。だいたい今日は適当に女を雇う予定だったではないか?!」

ヴァンに必死で目で訴えても、ニヤニヤと楽しそうにしているだけで、一向にとりあってくれない。

とりあえず話を合わせて店を出ることになったが、先に行こうとするヴァンを急いで引きとめて小声で激怒する。

「おい、どういっつもりだ」

「頑張れよ。探してたのは君だよ、とか言ってさっさと好きだって

言つちまえばいいじゃねえか。」

「今回の政略結婚を取り付けてきたのはセツだぞ。断るのを手伝つてくれなんていえるか!!！」

「はあ、乙女心が分かつてないねえ。『断るのを手伝つてくれ』じやなくて、『好きだ』って言やあいんだって」

ヴァンは最後にそう耳打ちをして、ケタケタ笑いながら行ってしまった。

それを簡単に言えれば苦労はしない。

今まで築いてきた友情はどうすればいい。

セツを困らせたくはないのだ。

でも……

今日ぐらい許されるだろうか。

「セシリア」と名前でもかまわないか？」

「どつぞ……ご自由に」

一瞬頬を染めたように見えたのは、おれの願望が見せた錯覚だろうか。



## 第三十二話

店のあつた山のふもとから街の中心部まで、セツは必死になって色んな女性に声をかけてくれていた。

「グレン団長の思い人」が自分だんて、きっと思いもしていないのだろう。

意識されていないことに落ち込みながら、そして頑張ってくれているセツに申し訳なく思いながら、おれは嬉しい気持ちを押し殺すことができないでいた。

セツとこうして二人だけで過ごすのは数週間ぶりだった。セシリアとしての彼女とは初めてだ。

にやけた顔をしていた自信がある。

セシリアの格好をしている時も男物しか見たことがなかったので、今日の礼にと女物の服を一式プレゼントすることにした。

ああ、これは……

セツの休暇に騎士団の見回りと称して街に出て、セシリアとして過ごしているセツを遠くからたまに眺めていたから知っているのだが……こんな変質者のような行為は口が裂けても言えない。

自分でもどうかしていると自覚しているので許して欲しい。

とにかく。

今だけは、セツを騙す様なことをしていることも、政略結婚のことも、すべて忘れてただのグレンとセシリアとして、楽しく過ごしたかったのだ。

試着室から出てきたセツを見て、おれはしばらく固まっていた。

女物の服を着てうっすらと化粧を施したセツは、本当に綺麗で……

うまい賛辞が出てこなくてがっかりさせてしまったかもしれない。セツは服を「いらぬ」と突っ返してきたが、その主張は受け入れず、無理矢理着せてそのまま店を出た。

それが失敗だと気付いたのは、店を出て街の中央へ出てきてからだ。沢山の人がセツを見て振り返る。女性からは感嘆の声がもれ、男性陣は顔を赤らめて見惚れていた。

セツには自覚がないようで、何か勘違いしている。

今度こそ女性が喜びそうな褒め言葉を言わなくては。と思っていたのだが、言い淀んでいるとセツは「何？」と顔を近づけて覗き込んでくる。

背丈があまり変わらないので、顔が近い!!

そんなことで顔を赤らめている自分が恥ずかしくて、もう誰にもこんなセツを見せたくなくて、裏道へと逃げ込んだ。

そうそう、騎士団内では、ヴァンが街で金髪の美女とよろしくやっている。というのは有名な話で、「金髪の美女」セツ隊長だと気付くものはいなかったが、おれは気が気ではなかった。

ヴァンは、セツが女だと知っている。

それをセツが知っているのかどうかは分からない。怖くて聞いたことがない。

どちらにしても、街で見かけるヴァンとセシリアは楽しそうだった。クロエではなくヴァンのために今は騎士団にいるのだろうか？と考えたのも一度ではない。

どうしても確認したくて、思い切って聞いてみたが、それは違ったらしい。

「違う!! わたしはっつ」

その続きに自分以外の誰かの名を聞きたくなくて、曖昧に微笑んだ。

うまく笑えているだろうか。

セツはそれ以上何も言わなかったのでほっとしていると、話題は思  
い人の話になってしまった。

「ところで、今探してる女性とはどこで出会ったの？」

「?!」

この動揺がばれていないことを祈る。

「話しかけたことはないんでしょう?」

「まあ……そうだな」

街で見かける『セシリア』に話しかけたことはない。

「じゃあ見かけたのはどこ?」

「……」

「グレン?」

しばらく黙っていたが、セツがしつこく質問攻めにしてきたので、  
ようやく重い口を開いた。

「王宮だ、王宮」

嘘は言っていないぞ、嘘は。

「やっぱり?!」

「?!」

ばれたのかと思って一瞬おののいたが、咳払いをしてすぐに体制を  
整える。

「やっぱりって何だ、やっぱりって」

「実はわたしの友人にそれらしき人がいるんだ。王宮にも出入りし  
てるし、多分間違いないと思う」

東国の姫君の次は、セツの友人?

そいつとおれが結婚しても、セツはなんとも思ってくれないのだな

……

もう少しでそんな自分勝手な言葉が出そうになった。

押し黙っているとセツも気まずそうに顔をうつむかせる。

こんな顔をさせるために、今日は付き合ってもらったわけではない

のに。

いつか笑い話にできればいいなと。

少しでも喜んだ顔が見ればいいなと。

ただそれだけだったのに……

一瞬の静寂を破ったのは、遠くで飛び交う異様な人々の声だった。

### 第三十三話

「何の騒ぎだ……」

遠くから聞こえてくるのは銃声と異様な人々の声。

おれたちは港から走ってきた一人の少年を捕まえて、海賊が出たことを知った。

そんな事態にもかかわらず、セツを見つめて顔を赤らめている少年に腹が立って睨んでやると、おれと目が合った少年は一瞬ビクツと震えて固る。

そんな少年も、不安げな顔をしているセツを見て『きっと騎士団の兄ちゃんたちが海賊なんかすぐやつつけちまうよ』と誇らしげに答えて去っていった。

睨んで悪かったな、と後から思ったおれはだいぶ大人気ないと思う。当たり前のように一緒に現場に行こうとするセツを止め、おれは一人で港へと向かった。セツが一緒だと心強いが、セシリアの格好で騎士団の前で大立回りをするのはまずいし、彼女は防具もつけてない。

おれは一応時期国王の身なので常に防具を身につけているし、武器も携帯している。他の騎士団も現場へ向かっているはずだし、セツの手を煩わせることもないだろうとこの時は軽く考えていた。

早く終わらせてセツにきちんと気持ちを伝えよう。

言ってしまうば友人としてはもう側にいることはできないかもしれないが、遠くで見守り続けることは出来るはずだ。

そんな思いで、急いで港へと向かった。

港には既に人だかりが出来ていた。現場は思ったよりも混乱してい

る。

海での暗黙の了解があったセントレアの騎士団は、船上戦に苦戦していたのだ。

今後の戦略と訓練内容の大幅な見直しが必要だな……と後悔している暇もなく、船内に潜入し船長室を探しあてた頃には、一緒にいた若い団員の疲労は目に見えていた。

狭い船内での慣れない戦いに、自分自身も疲れが見え始めた頃、その声は聞こえた。

「グレンっつー!!」

扉を蹴破って入ってきたのは、間違いないくセツ……いや、セシリアだった。

「セシリアか?! 阿呆が……早く下がれ!!」

防具をつけていない丸腰のセシリアに動揺していると、彼女はどこからか短剣を取り出し一人二人と倒していく。

あの短剣は確か……

横目で見てみると、なぜか一瞬セシリアの殺気が緩んだ。

その一瞬の隙を突いて、敵の一人がセシリアの死角に入り込む。

ドスッ

「防具も……っつ……けずに、くるやつがあるか……あほづが……」

気付いた時にはその間に入っていた。

体を伝わる生暖かい感触に、自分が血を流していることに気付く。

「い……やつつ……グレン!!」

遠くでセシリアの声が聞こえる。

ああ、こんなことなら早く伝えておけばよかった。

たった一言好きだ、と。

それだけで良かったのに。

声にならないそれは、深い闇の中へと落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7329b/>

---

政略結婚お断り！！

2011年10月11日12時55分発行